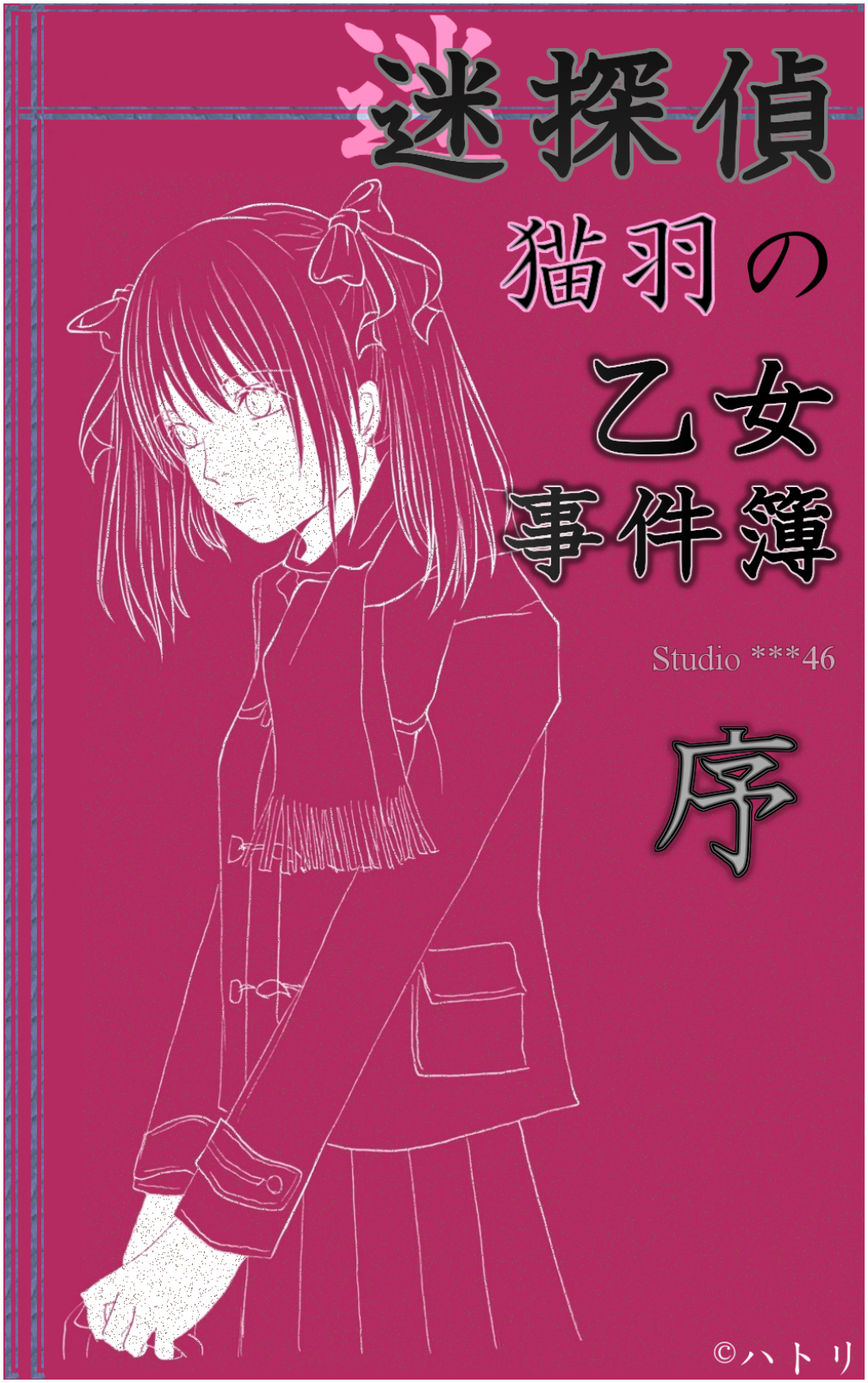

迷探偵
猫羽の
乙女
事件簿
Studio ***46
序
©ハトリ

目次

★棯猫羽　-悪魔使い- 1
-a learner Detective- 14
☆烏丸悠夜　-神童- 16
-INFORMATION- 22
神探シ　-裏編- 23

橘診療所 -BlueRosary-　※ｼﾘｰｽﾞﾈﾀﾊﾞﾚ
○ X － C 日：雨久花 39
○ X － A 日：Lost Hexagram 40
○ X 日：橘診療所 42
○七夕：迷探偵猫羽の乙女事件簿 44
○盆前：探偵に天使は味方です 46
● Sheol　-有り得なかった夢- 48

★棯猫羽　-悪魔使い-

こんにちは。私、棯(うつぎ)……猫羽(ねこは)っていいます。
暑い暑い、七月になりました。期末テストが終われば高校の夏休みです。

私は高校一年生です。きれいな新しいマンションに下宿していて、そこで家事を教えてくれる外国人のお手伝いさんが、珍しい銀髪を揺らしながら、私ににこりと言ってきました。
「猫羽さま。今月は早めに、玖堂(くどう)家にご挨拶に行かれてください」
「――え？　今、何て？　ソウクさん」
「診療所の方に、猫羽さまをお待ちの来客があるとのことです。ですので今日、高校からお帰りの際によろしくお願い致しますね。バイト先にはワタクシから連絡させていただきますから」

なんだろう。誰だろう、私を待ってるお客さんって。
玖堂さんは、私の下宿費を出してくれてるお金持ちの人で、猫羽のおばあちゃんの知り合いなんだって。月に一回、仕送りをもらいにいきつつ挨拶に行くけど、高校からはどうやって行けば良かったかな。あれ、道がよくわからないなあ。
そうだ、サトシくんにお願いすればいいかな。玖堂さんちの三男だって言ってたから、一緒に帰ってもらえばいいんだよね。

このところ、私、物忘れが激しいんです。バイトもずっとお休みしてます。
代わりに毎日、高校からの帰り道で紫陽花が沢山咲く公園に寄ります。とても平和だし、もうバイトはしなくてもいいかなって思ってきてます。
あんまり、行く気がなくなっちゃった。高校では橘さんって女の子が、学生の本分は勉強ですってうるさいし、部屋に帰ればお手伝いさんと家事の練習で忙しいしね。バイトの頃の生活なんて、そろそろ記憶の彼方です。
そうなるとお小遣いは仕送りをやりくりするしかないから、玖堂さんの所に早くちゃんと、顔を出しに行かないとだね。
玖堂さんがわざわざ派遣してくれた、家庭教師役のお手伝いさんに背中を向けて、私は今日もぼんやりと、高校への道のりを歩き始めるのでした。

今日はお天気が悪いです。梅雨はこの間終わったというけど、じめじめした空の下で、サトシくんはいつも通りに元気そうでした。
「本当、珍しいよなー。猫羽ちゃんがおれと、家に帰ろうだなんてさ！」
上り坂をぐいぐいと進む笑顔のサトシくんは、部活までお休みして、私をお家に連れてってくれます。
土曜日だから半ドンで、部活も頑張り時だろうし、私は終わるまで待つって言ったんだけど。どうしてなのか、サトシくんも何だか急いでるみたいでした。
「それにしても猫羽ちゃん、大丈夫、痩せてない？　診療所行くならついでに診てもらうといいぜ？　最近ちょっと病んでるよな、猫羽ちゃん」
私はただ、うんうんと頷いて、ついていきます。何を話せばいいのか、よくわからないから。
頭はずっと、ぼーっとしてます。元気なのは、授業を聞いている時くらい。

ふっと、少し前を歩くサトシくんが、とても嫌なお話を急に出してきました。
「まあ、ここんとこ、物騒な事件とかもあったもんなー？　バイト止めるならちょうどいいと思うし、無理しないでな、猫羽ちゃん！」
「……――」
うわあ、やだなあ……バイトの話なんてされたせいか、何だか頭が痛いや。
考えたくないんです。今はとても、しんどくなってしまって。
いつからこうだったっけ。何でバイトがイヤになったんだろう。
そもそも私は、どんなバイトをしてたっけ……そんなことよりも、橘さんに怒られるから、ちゃんと勉強をしなきゃいけないのに。

黙りこくる私に、サトシくんが一瞬、悲しそうな顔をしたように見えました。
私にはあんまり、お友達がいません。同じクラスのサトシくんと橘さんくらい。
ホナミとユイって知り合いはいるはずなんだけど、全然見かけないし、元気がなくなると人間って、こうして一人になりやすいんだね。
サトシくんとお話ししたのも久しぶりです。まるで私の味方は、下宿で待ってるお手伝いさんだけ。そんな気持ちになってきちゃいました。

玖堂さんのお家につくと、サトシくんは私の背中を押すようにして、お家の一部の医院に来たのでした。
「先に診療所に寄っていきなよ！　母さんまだ、仕事中かもしれないし」
いつもと違う日に挨拶に来たので、時間がちょっとずれるみたいです。
私は軽く頷いて、サトシくんが本邸の方に帰っていくのを見守ります。その後、黒い扉の前に立つと、体が勝手に緊張してきました。

「うわ、やだな……全然知らない所に、初めてきたみたいな感じ」
　広いお屋敷の片隅にある、こじんまりとした白い壁の診療所。
　ここには私、滅多に出入りしません。だって来ると、本当のお家に帰りたくなっちゃうから。
　あれ、何で帰りたくなるんだっけ？　　まぁいいや、とりあえずは早く、私を待ってるってお客さんに会いにいかないとね。

　そろそろっと扉を叩くと、中からは、元気な女の子の声が聴こえてきました。
「あ、猫羽ちゃん？　　大丈夫だよ、開いてるよ！」
　誰だろう、向こうは私を知ってるみたい。がちゃりとノブを回すと、その先には受付の所に立った、お人形さんみたいな恰好の女の子が待ってました。
　おそるおそる入った私が、狭い受付の方を見ると、黒い髪で黒い目の小さな女の子がいます。私を見て笑ってくれたので、ちょっと安心したのとは裏腹に、女の子はとんでもないことを口にしたのでした。
「猫羽ちゃん、今日は、悠夜（ゆうや）くんが会いに来てくれてるよ！」
「って――えっ……ユウヤ、が……！？」
「そこから奥へどうぞ。鶫（つぐみ）さんと一緒に、先生の部屋で待ってるから！」
　本当にびっくりして、それ以上何も言えない私の前で、受付の奥にある扉へ女の子が私を呼び入れます。
　ユウヤとツグミ。びっくりするしかない人の存在に、私はますます緊張して、受付カウンターの横をしずしずと通るのでした。

　ユウヤもツグミも、私が下宿でなくて元のお家にいる頃、よく遊びに行った御所の人達です。
　歴史あるそこの御所には沢山人がいるんだけど、その中には何人もの霊能者さんがこっそり住んでて、人知れず世の怪奇事件を解決してきたんだって。
　何だか陰陽師みたい。でもそれは全然華々しい仕事じゃなくて、むしろ色々辛いことがあるから、二人共あまりしたくない、と言ってるみたいだけど。
　奥の部屋に入ると、テーブルセットや机やベッドが一通り置かれた、豪華なホテルみたいな所で、ユウヤとツグミがソファに座って私を待っていました。
　肩までの短い赤い髪で、鴇色の小袖を着ているツグミが、私を見るなり立ち上がって声をかけてきます。
「久しぶり、猫羽ちゃん。元気にしてた？」
　座ったままのユウヤは、いつもの陰陽師みたいな姿とは違う服を着ていて、私はびっくりして声が出ませんでした。

「……」

　何も言わないユウヤは、私をちらりと見ただけで、不機嫌そうに俯いてしまいます。猫羽とユウヤは、元々あんまり、相性が良くないみたいなんだ。
　それでもどうしてユウヤが、まるでサトシくんみたいな学生服を着て、そこに座ってるんだろう。何だか怒ったような顔でもあって、私はちょっと固まって、ユウヤをじっと見つめました。

　びっくりしてる私が何も喋らないので、普段からあまり笑わないツグミが、困ったように首を傾げました。
「ごめんね、驚いたよね？　　あのね、実は今日は、猫羽ちゃんにお願いしたいことがあって」
「……え？」
「ちょっと今日一日、悠夜を連れてこの辺りを案内してあげてくれる？　　最近悠夜、御所の派閥争いに巻き込まれて、疲れてるみたいなのよ」
　そう言えば、ユウヤは御所の霊能者さん達のまとめ役な、ヨリヤお父さんの跡継ぎでした。猫羽はヨリヤお父さんが大好きで、御所に遊びに行ってたんだ。

　ユウヤもヨリヤお父さんを尊敬していて、猫羽とユウヤは、ヨリヤお父さんの取り合いをしてるって、ツグミには言われました。
　だからユウヤは、私のことがキライなはずなんだけど。その私に、ユウヤのことを頼むなんて、ツグミ、どうしたんだろう？
「……」
　ほら、ユウヤも不快そうな顔で、さっきから私をじっと見てるし……。
　でもまあ、私は、ユウヤのこと、好きだから。
　何かもしも、ユウヤの力になれることがあるなら、それは頑張りたいな。

　断る理由もないし、玖堂さんに挨拶をしに行ってから、私はユウヤを迎えに診療所に帰りました。
「――あれ？　　ツグミは来ないの？」
「……鶫ちゃんは燕雨（つばめ）くんを迎えに行ってます。一緒にいるはずの翼槞（よくる）くんに、こちらに来てもらわないといけないので」
「――？」
　ツバメは、私、猫羽の兄さんの名前。でも、ヨクルって、誰のことだろう？
　私の前では丁寧語しか使わない、冷たそうな顔のユウヤが、玖堂さんの家の大きな門をさっさと通り抜けながら、ふっと私に振り返りました。
「……こちらでの生活は、どうですか。……猫羽さん」
「――え？」
　案内の必要、あるのかな？　　ってくらい、慣れたように門を出るユウヤにも驚くんだけど。

冷たいというより、体調が悪そうな様子で、もう一度ユウヤが私のことを、わざわざ尋ねてくるのが不思議でした。
「最近、変わりはないんですか。……猫羽さん、には」
ヨリヤお父さんによく似ているらしい、青っぽい黒い短髪で、キレイな顔をしているユウヤ。髪と同じ色の目はユウウツそうで、ほんとに疲れてるんだな、とちょっと可哀相になってきました。

そんなしんどそうなユウヤが、私のことより気になるって返すと、ぷいっと、ユウヤはつれなく背を向けてまた歩き始めました。
「――どこ行くの？　こっちは、高校の方に行く道だけど」
「……猫羽さんの高校か、その付近を見せてください。」
「高校？　だから、学生服なの？」
答えずにユウヤは、さっさと行っちゃいます。私が案内しなくても、ユウヤは凄く霊感が強いから、その時何をすればいいかは大体わかっちゃうって言うね。
道とか場所とか、行くべき所が占いでわかるんだって。そうなるとむしろ、案内されるのは私の方じゃないかなあ。

素っ気ないユウヤの後ろを、とことこと、小走りでついていきます。
どうしてここに来たんだろう。顔色がいつも以上に良くないけど、ほんとに大丈夫なのかな。
でも、私がきいても答えてくれないのかな。ユウヤは猫羽のことが、キライだから。

せっかく久しぶりに会えたのに、何も話すことなく、速足のユウヤの背中を見てると、胸の奥にしみじみと変な気持ちが浮かんできました。
さっきまでの、わけのわからなかった緊張とはまた違う、もやもやとした心。
あれ、おかしいな。私、ユウヤに嫌われてることくらい知ってるし、こんなもやもやするようなことじゃないはずなのに。
「……猫羽、さん？」
「――あ、ごめん」
立ち止まった私に、億劫そうにユウヤも立ち止まります。私、完全にこれ、足手まといじゃないかな。
御所で色々あったっていうし、気晴らしとかをしたいなら、ユウヤが一人で散歩する方が良くないのかな。私がここにいる理由がわからなくて、気持ちが落ち着きません。それに私には、気になることが後一つあって。
でも私がまた歩き出すのを待ってるユウヤは、一人で歩く気はないみたいで、それもよくわからなくて。不意に私は、理由のわからない怖い予感がしました。

今にもひたひたと雨が降ってきそうな、薄暗い夏の空が悪いんだと思う。
人気のない丘の上の住宅街は、何処となく不吉でした。ユウヤが無表情に、ずっと私を待ってるけど、私は下り坂で止まったまま、動く気になれません。
「.....」
「.....」
黙ってユウヤと、見つめ合います。不思議とユウヤは怒ってなくて、ただ、静かに私を見てます。海の底よりきっと深い、青っぽい黒闇の目で。

「.....ねえ、ユウヤ」
いつになくユウヤが、穏やかに思えたせいか、私は勇気を出して、今の心をそのまま伝えました。
「.....ねえ。こっち、やめよう。ここから高校に行くにはこの坂しかないけど、先に私、家に帰りたい」
「.....」
「家に帰るなら反対の方なの。帰ったらその次に、高校行くって約束するから.....仕送りをもらった日は、まずまっすぐ家に帰って、それからバイトに行くの」
.....どうしてなんだろう。ユウヤがふっと、悲しそうな顔で私を見ました。
私はもう、最初から、わけがわからないままなんだけど。どうしてユウヤが診療所に来て、私が案内することになって、そして高校へ行こうと言うのか。
わからないけど、ひとまずこれは、譲れないの。これは猫羽の、大事なお金だから。バイトに行く気はないけど、まずは私、家に帰らなきゃいけないんだ。

こんな風に、私が我が侭だから、ユウヤは私のこと、キライなのかな。
でもユウヤは、わかりました。と頷くと、今度は私を追いかけるようにして、数歩だけ後ろを歩いてくるのでした。
うん。ユウヤはやっぱり、優しい人だよね。私には全然笑ってくれないけど、怒ってるわけじゃないのはわかりました。
あくまで私のペースに合わせて、何も言わずにユウヤはついてきます。何か目的があって来たんだと思うけど、自分の都合はほとんど後回しで。

何か喋りたいな。そう思うけど、ユウヤは何なら喋ってくれるかな。
私は昔から、ユウヤが好きです。ユウヤは霊感が強過ぎるせいで、世界中の悪いものが自分の中に入ってくるような、そんな辛い思いを何度もしてるんだって。
それがどういうことかは、さっぱりよくわからなかった。これ、思い切って本人にきいてみたら、答えてくれることはあるのかな？
「ねえ、ユウヤ。悪いものって、何？」

「……は？」
「私は、『あまりよくないもの』だって、ヨリヤお父さんに言われたから。よくないものは、悪いものなのかな、って」
「……父様が猫羽さんに、そのようなことを？」
　ユウヤは意外そうな顔で、横を向いて歩く私を斜め後ろから見直しました。
「貴女は――どう思うんですか？」
「え？」
「貴女は、自分を、『よくないもの』だと思うんですか？」
「え……うーん……それは……」
　話をそらされちゃいました。私はユウヤのことがききたかったのにな。
「私はあんまり、そう思わないけどなあ。『よくないもの』って、何なんだろう」
「……」

　あれ、何でだろう、ユウヤが複雑そうにしてます。
　やっぱり私、悪いものなのかな。でも聞き返したのはユウヤで、さっきの声は、「よくないものじゃないよ」みたいな、優しい感じだったのにな。
「よくないものは、悪いものってことじゃないですよ。……猫羽さん」
　またユウヤが、悲しそうな目になっちゃいました。私は私で、よくないものと言われてるのか、悪いものと言われてるのか、わかりにくくて困ってます。

　私は悪いものだけど、よくないものではない、と言ったのかな。それとも、私はよくないものだけど、悪いものではない、と言ったのかな。日本語って、ほんとに難しいね。

　溜め息をついたユウヤが真横に立って、私を見ずに淡々と言ってきました。
「猫羽さんはよくないものですよ。それは断言できます」
　私が困ってるから、はっきり言ってくれたみたい。やっぱりよく気が付いて優しいな、ユウヤって。
　そっか、よくないものなんだ。でも悪いものじゃないんだ。不思議。
「でも貴女は、そう思わないんですね」
「え？　　うん。何でよくないのか、何処がよくないのか、よくわからないよ」

　猫羽はよく、悪魔使いだとは言われます。同じクラスの橘さんは、私を見守るように兄さんから頼まれた悪魔で、だから色々口うるさいんだって。
　悪魔って悪いものだよね。それならそれを使う猫羽も、悪いものっていうならわかるんだけどな。

「猫羽さんは、よくないものではないと？」

ユウヤが不可解そうに聞き返します。別に私を、責めてるわけじゃないみたい。
私は嘘をつくのは苦手だし、そのまま浮かんだこたえを言います。
「うん、私にはわからないよ。よくないものって、どういうもの？」
「……」
学生服のせいか、普通の人にしか見えなくなったユウヤは、歩きながら手を組んで考え込みました。
「……悪いことをするつもりでも、良いことをするつもりでもない人ですよ、猫羽さんは。それは、よくないことですね」
「……？？」
「自分が何をして、その結果に何が起こるか、もう少しだけ考えてほしいと、僕は何度も言いました。でも猫羽さんは、ちっとも改めてくれませんから」
あれ。ユウヤ、一気に不機嫌そうになっちゃった。
でも私は、こうしてユウヤとお話しをできるのが嬉しくて、ついつい大きく笑ってしまいました。
「なにそれ。ユウヤ、まるで、心配してるみたいだよ？」
「……」
あ、すっごく不服そうだね。何だかとても、不思議な安心が込み上げます。

ユウヤは私の方を見ないまま、歩調を速めて狭い道の端を行きます。
「猫羽さんも燕雨くんも、兄妹揃って、自分自身のことに無頓着過ぎますよ。父様や鵜ちゃんがいつもどれだけ心配して、胃を痛めていることか」
「そうなんだ。でも二人共、ユウヤのことも心配してるよね？」
「何で僕の話になるんですか。今は貴女が、猫羽さんを……」
「お願い。ユウヤのこと、もう少し知りたいよ。私のことキライでいいから、それでもユウヤの役に立てる方法、何か教えて？」
ちょっと強めに、今度はしっかり頼んでみます。
私の唐突なお願いに唖然としたみたい。ユウヤがぱっくり口を開けてます。こんなに沢山お話しできたなら、私はそれを何とかしたいんだけど。
ずっと、嫌われてるから仕方ないって、諦めてきたこと。でも、それは……私にはどうしても、納得できなかったから。

「ユウヤの役に立ちたいよ。いつもそう思ってる。今は無理だけど、将来は、ユウヤの役に立てるわたしになりたいの。それがわかれば、私は安心なの」
「――……」
ユウヤが速足だから、後ろから袖を掴んで言うと、突然ユウヤは立ち止まりました。
「一つ、訂正します……貴女は、よいものですよ。それがわかりました」
「――え？」
「そうですよね。でなければ、猫羽さんは……」

　私はまっすぐ下宿に向かってたんだけど、ここは高校の方にも行ける分岐路でした。高校に行く側の道を見て、ユウヤが明らかに物惜しそうしてます。
「こっちの道からは、家には行けないんですか？」
「行けるけど……遠回りだよ？」
「……貴女がいいなら、こっちから家に行きませんか？　　高校はもういいので」
「……」
　ちょっと悩みます。あんまり寄り道はしたくないな。
　でもそうしたら、歩く距離が長くなるだけ、ユウヤのことも教えてくれるというので、私はあっさりと頷きました。

　もう一つ訂正しますけど、と。ユウヤがつれない声で言い始めました。
「僕は別に、猫羽さんを嫌ってません。不必要に近付かないだけです」
「それ……嫌ってるって、言うんじゃないの？」
「猫羽さんがそう思うならそれでいいです。どうしてもの時は力をお借りすることもあるでしょうが、猫羽さんが役に立つべき相手は、僕じゃないですよ」
「兄さんやツグミは近付いてもいいのに」
「二人は人間じゃありませんから。猫羽さんは人間として、こういう場所で、穏やかに生きていく方がきっといいですよ」
「……え？」

　ぴたりと、突然冷たい顔色になって、ユウヤの足が急に止まりました。
「と言っても――」
　凄く怖い顔をしてます。睨む先は私じゃなくて、その深い黒の目に映されていたのは、下宿と高校の間にある何気ないところ……。
「ここは確かに、性質が悪いですね。こんな闇を迂闊に放置するから……貴女のような、犠牲者が出る」
「……え……？」

　さっきまであんなに、気軽に色んな話をすることができたのに。
　今はもう、トゲトゲした雰囲気を隠しもしないユウヤは、小さな赤いレンガの花壇が境界になる入り口で佇んでいました。
　そこは私が、ここのところ、学校の行き帰りに寄っていた紫陽花の公園で……。

　そしてユウヤはさっき、よくわからないことを、最後に口にしていました。
「兄さんとツグミは……人間じゃない、って……？」
　え……それ、どういう、ことかな？
　橘さんと同じで、悪魔か何か、っていうこと？
　人間じゃない人って、そんなに沢山、人間の周りにいるものなのかな？

厳しい顔付きで何も答えないユウヤが、花壇と花壇の間になる入り口から、公園に入っていこうとしました。
そしていっそう、顔を強くゆがめます。まるで入ろうとした途端に、体中に電気が走ったみたいな感じでした。
舌打ちしたユウヤは、ポケットから一枚、不思議なお札を取り出しました。
「.....人間だけの世界に、闇なんていらないものなのに。たとえかつて、神域であったからとて、このような悪戯は許されません」
「.....？」
誰と話してるのかな。何か悪い霊でもいるのかな。私は霊感がさっぱりないから、何もわからないけど。
ユウヤが指で掴んだお札は、その場でばさばさっと鳥みたいになって、公園の中に飛び込んでいきました。
「誰の責をも問えない場所なら――僕が介入することの責も、誰にも問えない」
公園に入った瞬間、紙の鳥が炎上します。同時に公園の空気にも一瞬、ヒビが入ったみたいに私には見えました。
その後、突き刺さるように寒い風が、公園の中から吹いてきます。でもそれも長くは続かなくて、やがて、ユウヤが今度は邪魔をされずに、静かに公園に入っていきました。

何が起こったかはさっぱりわからないけど、私も何となく、ユウヤに続いておなじみの公園に入ります。いつもはこんな、変なことは起こらなかったのに。
誰もいない、花の季節も過ぎた淋しい公園。そう言えばここはほとんど人が来ないから、私は気に入ってたんだ。まるで誰にも、その存在を気付かれてないみたいに。
「たまにあるんですよ。きっと昔、神社か祠だったんでしょうけど、もうその闇は閉ざされたのに、主だった者達はそれに気が付いていないんです」
「え.....」
「そういった所は、同じような闇を引き寄せてしまいます。そうでなければ、人はそのまま――何も迷わず、冥府に行けるのに」
公園の端、ぽつんと一つだけある遊具のブランコに、ユウヤが座ります。

公園に入ってから、ユウヤはずっと胸を押えてました。あんまり苦しそうで、私はブランコの横に立って、鎖を掴みます。
「ユウヤ.....どういう、こと.....？」
ふるふると。自分の手がふるえてるのが、今更私はわかりました。
ユウヤはそんな私を見上げながら、いっそう悲しそうに、顔を強くしかめます。
「.....だから、気が付いていないんですよ。ここに引き寄せられてくる、闇のもの達は――自分が今、どうなっているのか、わかっていないんです」
「.....――」

冷静に見せかけて、絞り出すような声で言う、苦しい顔のユウヤ。

　それで私は――……ユウヤがどうして今日、わざわざ訪ねてきたか、やっとそのわけがわかりました。

「……そっか……ユウヤは……猫羽を、助けにきたんだね……」

　自分が今、どうなっているのか、気付いていないものが集まる公園。
　それはきっと、わけもわからずバイトを止めて、頭がぼうっとしてる猫羽と――
　ツグミや兄さんが、「人間じゃない」と知らなかった、二人に会ったこともない「私」のことでした。

「――すみません。貴女にそれを、思い出してもらう必要はなかったんです」
　ユウヤが俯いて目を背けました。ここにいる「私」に、ユウヤはどうしてか、申し訳なく思ってくれてるみたいに。
「でも貴女は、覚えていなくても、猫羽さんのために動いていた。貴女は……猫羽さんになって、猫羽さんの役に立ちたかったんですね」
　独りきりで、何かをきっかけにして、ここに来るようになった女の子。
　その子はきっと、よくわからずにここにいた「私」を見つけて、そして……「私」を連れて、一緒に生きようとしてしまったバカな女の子。ユウヤはその子を助けに来たんだ、とようやくわかりました。

　すみません、と。ブランコの鎖を両手で掴んで、下を向いたまま、ユウヤがかぼそい声で私に謝ってきます。
「有無を言わさず、貴女を先に祓えば良かったんです。そうすれば――貴女は何も知らないまま、安らかになれたのに」
　「私」は胸に、ぽっかり大きな穴が開いたみたい。ユウヤはそれを悲しんでる。でもそれは、ユウヤのせいじゃないんだから、私は言い返すことにしました。
「……ううん。ごめんね……私、『猫羽』のこと、忘れてた。それは嫌だから、思い出せて良かった。……そうだね、『猫羽』に、戻ってきてもらわないと」
　私も全然、よくわかってないけど、私がいると「猫羽」はいなくなるんだ。私は猫羽といっぱいお喋りしたから、少しは猫羽らしくはできたと思うけど、知ってる人達から見たら、私が猫羽じゃないのは一目瞭然だよね？

「ごめんなさい。私……これで、猫羽がいなくなるなんて、思ってなかったの」
　……知ってます、と。ユウヤは静かに顔を上げて、私をまっすぐ、見つめてきたのでした。

　その、高校の制服でツインテールの女の子は、通学路に誰もが避ける公園があることに、気が付いてしまったみたいでした。
　そういう場所には、本当は入っちゃいけないんだね。でもきっと、猫羽にはそれより、「私」がここにいることが気になったんだと思う。猫羽に霊感はなかったはずだけど、「私」は霊かもよくわからない、「私」だから。
　毎日のように、ここに来る猫羽と、私はだんだん、沢山お喋りをするようになっていきました。

　猫羽はいつも、自分が誰かもわからない私に、何も聞かずにいてくれました。
「玖堂さんのお家はね、すごく広いお屋敷なんだよ。でも、診療所の方には、わたしはあんまり行かないんだ。家に帰りたくなっちゃうから」
――知り合いの人でも、働いてるの？
「ううん、違うよ。でも、知り合いのヒトはたまに来るよ。元々、ツグミとかユウヤがよく相談に行ってた診療所なんだ」

――ツグミ？　ユウヤ？
「あ、ツグミはね、兄さんの大切なヒトなんだよ。わたしのことも、小さい頃から可愛がってくれて。ユウヤはわたしの二つ上で、大好きなヨリヤお父さんにそっくりな、ヨリヤお父さんの跡継ぎの優しい人なの」
――ヨリヤお父さんは、猫羽が好きな御所の人だよね。
「うん。ヨリヤお父さんは、霊感がとても強くて、わたしはあんまりよくないものだってわかってたのに、優しくしてくれたの」
――よくない、もの？
「ユウヤはそれできっと、わたしが苦手なんだ。わたしがヨリヤお父さんを、取っちゃうと思ってるって、ツグミは言ってた。兄さんともツグミともいつも楽しそうに話してるのに、わたしにはずっと無愛想なの」

――……猫羽は、ユウヤのことが好きなの？
「うん。わたしはユウヤの役に立ちたい。ユウヤからはわたしがキライでも、ユウヤは霊感が強過ぎて大変そうだから……何か、力になれたらいいのにな」

　その時確か、猫羽はちょっと、いつになく悲しい顔をしていたと思う。
　私はそれが辛くって、ユウヤに会ってみたいって思ったんだ。
　猫羽はこんなに、いい子なのに……どうして、猫羽がキライなの？　って。

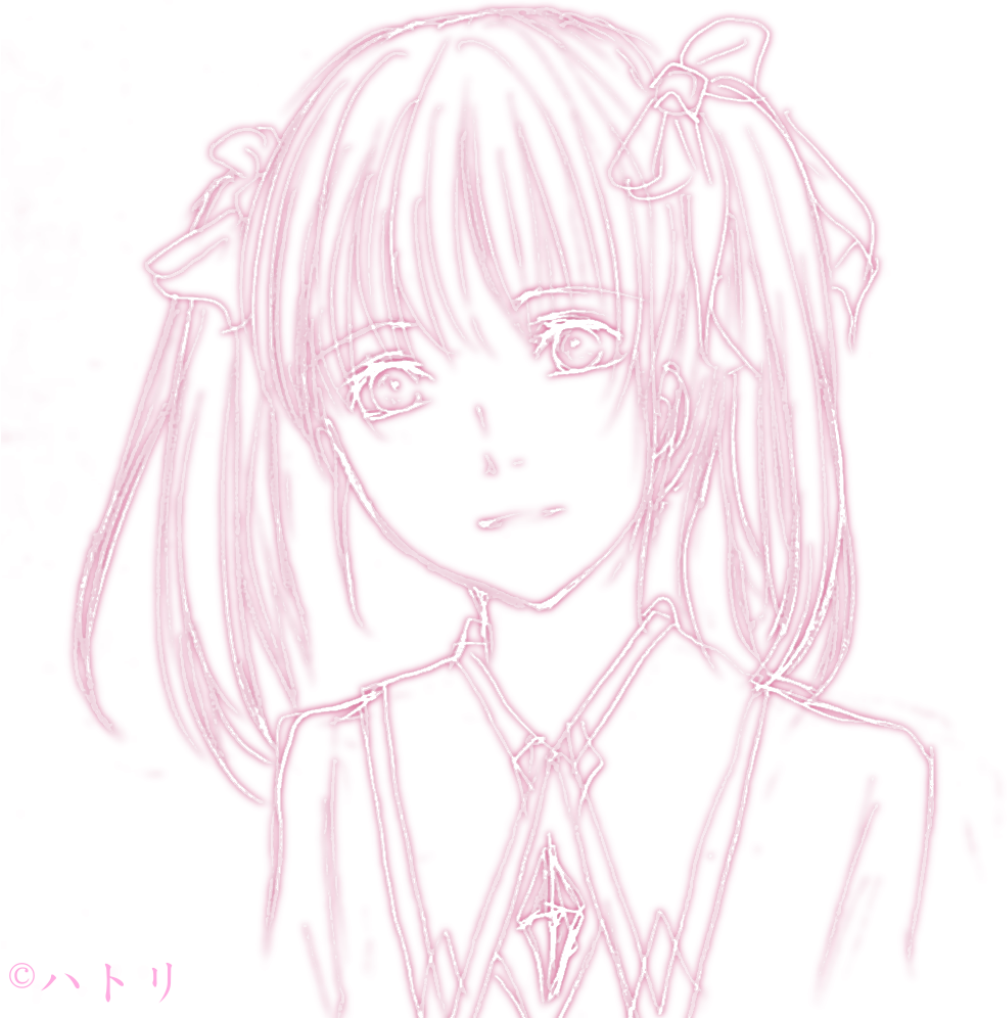
そこからいつの間に、私が猫羽になって、誰がどうして、ユウヤをここまで呼んでくれたかはわからないけど。

お手伝いさんでも、バイト先の人でも、きっと誰かが猫羽を心配したんだね。私は多分、ここにいたよくない何かだから、私がいなくなれば猫羽は元通り。

それなのにユウヤは、悲しそうにしてる。猫羽のために来てくれたのに.....会ったこともない私のために、心を痛めてる。あれからずっとブランコの鎖を握り締めて、もう日も暮れる時間になっちゃいました。

そんなんじゃ、霊能者さんをするのは大変だと思うな、ユウヤ。

でも猫羽には、手伝わせてくれないんだね。ユウヤは猫羽が、「キライ」だから。



-a learner Detective-

　気が付くと、わたしは真っ暗な夜の公園で、鞄も持たず手ぶらでブランコをゆらゆらと漕いでました。
　あれ、何でわたし、公園にいるんだっけ？　ここは確か、誰かの骨の一部が見つかる物騒な事件があって、調査のお手伝いに来た公園なんだけど……。

　あ、こんばんは。わたし、ウツギ・ネコハです。日本に勉強にきた異世界の悪魔使いで、探偵見習いのバイトをしてます。
　そんなことを考える暇もなく、隣にいる人の気配に、わたしはびっくりして飛び上がりました。
「え？　え！？　えええええっっ……な、何で、ユウヤ！？」
「……何でじゃないです。おはようございます、猫羽さん」
　こんな所に絶対いるはずのない、故郷にいた頃のわたしの大切な人。
　どうしてユウヤが隣でブランコをこいで、わたしと同じ高校の制服を着て、そして凄く悲しそうな顔なのか、わたしにはさっぱりわけがわかりません。

　街灯もなくて、他のお家の灯も遠い公園で、ユウヤの気配だけが温かくって。
　驚き過ぎたわたしは、あんまり懐かしいから、思わず涙が出てきちゃいました。
「何で、何で？　ユウヤ、どうして……え、おはよう？　わたし、どうして、わたしを起こしに来たの、ユウヤ？」
「当たり前です。本当は死神の翼槞（よくる）くんに頼もうと思ってましたが、その必要もなかったですね」
「え、氷輪（ひわ）くん？　氷輪くんもこっちに来てるの？」

　しばらく見かけないヒトのことまで、ユウヤが口にします。わたしはまだまだ、事情が何も掴めてなくて、ユウヤの方を向いたまま固まっちゃいます。
「水葵（なぎ）さんから翼槞くんに連絡が入ったのが、そもそもですから。猫羽さんがさぼってるから、何とかしろとの仰せでした」
「え……なぎ、何か怒ってるの？」
「あのヒトはいつも怒ってます。そして橘さんと呼べと、また怒ると思います」
　兄さんの頼みで、わたしを見守ってくれる悪魔の水葵。水葵の本当の主は、氷輪くんといって、兄さんも氷輪くんに仕えてるんだけど、最近会えないんだ。

とにかく、高校に通い始めてから全然会えてなかったユウヤが来てくれて、わたしは有頂天になってきました。
理由はわからないけど、ユウヤに会えて嬉しい。こんな日ってあるんだね。
ユウヤはわたしのこと遠ざけようとするけど、わたしはいつか故郷に帰って、兄さんもいる大好きな御所で、ユウヤに仕えるのが夢なんだから……。

「猫羽さんがめっきり遊びに来なくなって、最近の御所は平和ですよ」
「えええ……わたしそんなに、何かしたかなあ？」
「京の都でも屈指の聖域に、悪魔を連れて入るだけで有罪です。本当に、燕雨くんと似たり寄ったりの憑依体質なんですからね、貴女は」
「ええええ……でも今は、悪魔さんなしでも頑張ってるよ、わたし」
「どうでしょうね。悪魔以外に憑かれるようになっただけに見えますけどね」
「えええええ……ユウヤ、相変わらずきびしいね……」

ユウヤが疲れた顔をしてるから、もう時間も遅いし、診療所まで送ることにしました。
元々わたしも、診療所を通ってこの世界に来たんです。色んな世界に繋がるドアがあって、いつも不思議だなって思うけど、そうでないと、ただの人間のわたしに異世界留学なんてできないもの。
こんな風に、遊びに来るくらいの感覚で会えるとはさすがに思ってなかったなあ。それに、来てくれるなんて信じられない。ユウヤ、忙しいのに。

「ありがとう。ユウヤに会えて、すごく嬉しかった！」
公園を出る直前に、はしゃいだままのわたしは、いつになく大きな声でそう叫んじゃいました。
ユウヤはいつもの呆れた顔付き。でもふっと、黒い夜に包まれる公園を見て、そのまま溶けていきそうな小さな声で呟きました。
「……闇があっていいのは、ヒトの心の中だけです」

さよなら、と残して振り向かなかったユウヤに、誰かがさよならと応えた気がしました。
わたしの目ではもう観えない、迷宮という闇の中で。

＊　＊　＊

☆烏丸悠夜　-神童-

　人形の頭をよくすげ替えた。首から伸びる胴串が違う体に合わない時には削った。元に戻すと不安定になるのは当たり前だ。
　烏丸悠夜（からすまゆうや）は生来、人並み外れて霊感が強い。人型をした物には魂が宿るのをすぐに感じる。年月を経れば強力な付喪神（つくもがみ）になるので、早い内に頭を変えて禍（わざわい）の芽を摘む。異物を乗せられた人形同士で潰し合うもよし、頭か体にしか宿れなくなった魂がいずれ消えてくれるもよし。
　常人が同じことをすれば祟られる可能性もある雑なやり方だが、悠夜に手を出す愚かな魂はそうそうなかった。悠夜は日本からみれば異世界の京都を管理する家の次男なのだが、知る人ぞ知る呪術師の血筋で今代の後継者だ。
　今いる日本では「呪術」など、オカルトと馬鹿にされる話なのはわかっている。家でも普通の人間である使用人達も気味悪がったので、人形の頭を替える時には必ず片付けてから行った。

　そんな風に気を使っていても、悠夜の一家が周囲から怖れられているのは仕方がない。大切なのは分を弁（わきま）えることだと悠夜は思う。
　普通の人間と深く関わりはしない。悠夜は幼い頃からそう決めていた。
　霊能の使い方を教えてくれる父、旅がちの母、護衛をしてくれる兄。そして呪術に理解のある従姉（鵜）と従兄（槲）がいれば、悠夜の世界は平穏に完結していた。そう願っていた――その人間の幼女が現れるまでは。

「……何、してるんですか」
「あ。おはよう、ユウヤ。お邪魔してるね」

　十の歳、桃の節句の直前だった。少し前から度々訪れる漆黒の髪の幼女がいた。従姉の大切な人を助ける時に関わり合いになった相手だ。
　烏の黒髪の悠夜は普段、白い小袖と黒袴を着ていた。対して幼女は身軽な武闘服で、着物だらけの御所では目立つ姿を全く気にしていない。
　あまつさえその日は、従姉の七段飾りの雛人形を踏み台を使ってまで、一段目と二段目の人形の首を替えている現場を目撃してしまった。
「何で女雛と三人官女を入れ替えるんです。というか人の家の雛段を勝手に触るのは、無作法にもほどがあります、猫羽さん」

「うん.....ツグミがね、わたしの誕生日、お祝いしたいからおいでって。ついでにお雛様も見においでって」
「それは知ってます。だからここにいるのはともかく、何で人形の頭をいじるんですか」

　踏み台の横にちょこんと正座し、左で括るポニーテールを揺らして幼女が首を傾げた。
「だって、ユウヤもよくしてるよね？」
「それとこれとは話が違います！　　というか何で知ってるんですか」
　この幼女の、こういう淡々と目敏いところが苦手だった。せっかく日頃常識的に過ごしているのに、人目を気にしない幼女は台無しにする。
　悠夜達の家系の特異さを幼女は知っている。それで従姉の鶫（つぐみ）にも父にも可愛がられていた。

「あのね、この女雛さま、男雛さまがキライなんだって。それと官女さんは、いっぺん一番上に座ってみたいって。そうしたら今後、言うことをきいてくれるからって.....」
「ちょっと待って下さい。うちにまた何を、悪いものを連れ込んだんですか、貴女は」
　この人間の幼女には霊感は全くない。ただ悠夜の素行を当てたように、不思議な直観の気配探知力がある。その感覚で幼女が世界に見出す常ならぬものは、悠夜が視るその辺の霊より遥かに性質の悪いものだった。
「人の家の雛段に悪魔を憑けないで下さい。今すぐ暇を出して下さい」
「うん。ユウヤとツグミの味方をするって、約束してくれたから」
　だからこのまま、使い魔にすればいい、と言わんばかりの幼女。悪魔使いの異名を持つ非常識な者に、さすがの悠夜も声を荒げた。
「いりません！　　悪魔の下僕（しもべ）を使うなんて、うちの家名をますます貶める気ですか！」
　始末が悪いことには、幼女は完全に好意で言っている。悪魔も呪術も幼女にとって、何も悪いものではない感覚なのだ。

　悪魔と普通の霊魂の違いは実は大きくない。悪魔の方が方向性がはっきりし、魔性という力を基盤とするだけだ。妖怪や人間の霊魂は霊力の強さで格が決まり、気位の高いものが多い。その点悪魔はどんな高位の力の主でも、契約を行えば従ってくれる扱い易さがある。たとえ無力な人間の幼女が主人であっても。
「とにかく元に戻します。鶫ちゃんにも絶対見せられませんよ、こんな姿」
「.....」
　踏み台に乗って人形を元に戻す。隣で幼女は残念そうに見上げながら、文句は言わない。
「大体契約の代償はどうするつもりなんです。猫羽さんには魔力も霊力もないんですよ」
「.....ユウヤ、怒ってる」
「怒ってません。猫羽さんが考え無し過ぎるだけです」

どうせまた、魂の一部を悪魔に差し出し、自らの内に棲まわせて契約しようとしていたのだろう。その故も自分で言っていた通り、善悪など考えずに、ただ「悠夜と鶫の味方になってくれる」ことを望んで。

烏丸家には味方が少ない。「力」があるため、霊障があった時に助けてほしい者が多いことで存在を許容されている。それはまるで穢れ仕事、ゴミ捨て場の如き扱いで、悠夜は幼少から大人の汚さを嫌というほど見て育った。

幼女もその空気は知っている。ともすれば悠夜以上に気配には敏感で、様々な貴族が共に住まうこの御所で、烏丸家の立ち位置の難しさを感じているのかもしれない。

「……ごめんね。またユウヤを困らせたね」

純粋にしょぼん、としている姿が目に痛い。ただ悠夜達の役に立ちたがっている幼女を見ていると、人目を気にしているだけの自分が卑小に思えて嫌だった。本当は呪術も悪魔も、誰より否定しているのは悠夜自身だった。

幼い頃――と言っても八年前の夢を見て、十七歳の悠夜は目を覚ました。

息苦しさをすぐに感じた。口が渇き、よく眠れていないのが体のだるさでわかる。元々体力はとても弱い方で、環境が少し変わるだけでも体調を崩す。

それなのに現在、汚れた空気の人間世界にいる。悠夜の故郷とはあまりに違う科学文明の町で、知人が貸してくれた広いマンションの一室で体を起こす。

「父様と母様は、観光、でしたっけ……よくやりますよね、こんな世界で」

そもそもは、普段旅がちな母が珍しく帰ったのが発端だ。派閥抗争にほとほと疲れていた悠夜と父を、休養させたいと言い出したのだ。そうして半ば、逃げるように人間界に来た。常日頃顔を利かせている人外医療機関、「橘診療所」を通して。

軽くシャワーを浴びて、クローゼットからこの世界の学生服を取り出す。

空気も景観も至って悪いが、誰も悠夜達を知らない場所自体は居心地が良かった。元の世界より人間界は悪魔や霊能とは縁が薄く、悠夜達が普通でないと気付ける人間もほとんどいない。

「……猫羽さんとその周りを除き、ですが」

家を出る前に台所を覗くと、慣れたように二つお弁当が置いてあった。「猫羽ちゃんと食べてネ！」と、母の置き手紙付きで。

「母様……これは、余計なお世話です……」

もうすぐ悠夜は十八歳になる。元いた御所のしきたりでは元服の儀を迫られ、これでも可能な限りに引き延ばしてきた方だった。

　御所は烏丸家を汚れ役扱いしているくせに、悠夜もその兄のことも利用しようとしている。このところ政略結婚の申し込みが後を絶たず、硬派の兄は厳と断っているが、悠夜はいつも笑顔を絶やさないように過ごしてきた。
　だからその一言を言うしかなかった。
　後から後からしつこい縁談に、悠夜はある条件を、にこやかに言い放ったのだった。

　せっかくの母の、貴重なお弁当を腐らせるわけにいかない。猫羽は悠夜より少し前に、人間の生き方を学ぶために人間界に留学している。猫羽が通う高校に、悠夜も戸籍を偽って二学期から潜り込んだ。お弁当があるからと、昼は心ならずも屋上で待ち合わせをしていた。

「ねえ、ユウヤ。どうしてユウヤは、わたしのことなんて御所で言ったの？」
　猫羽はにこにこと、貰ったお弁当を心から嬉しそうに広げてつまんでいる。母と猫羽に本来面識はなかったのだが、こんな事態になったのはひとえに、悠夜の爆弾発言が原因だった。
「ユウヤのお嫁さんになりたいなら、『猫羽さん以上に使える人材でないと困ります』、なんて。珠音（たまね）お母さん、すっかりわたしがお嫁さんだって、勘違いしてるよ？」
　それは悠夜も誤算だった。ちょくちょく御所に顔を出していた猫羽は、純粋な可愛さでわりあい貴族達に気に入られていたので、まず名が通じることを前提で引き合いに出した。
　しかも当人は留学していて不在だ。だから迷惑をかけることもなかろうと考えたのに、よりによって両親共が、猫羽を追いかけて人間界に遊びに行こうと言い出したのだ。

「……勘違いだと、猫羽さんがわかっていてくれたら、それで十分です」
　ある意味それで、悠夜は猫羽の名を選んだ。猫羽は昔から人懐っこく、特に悠夜の父には酷くべたべたしていた時期があるが、そこに恋愛の類の情状はゼロだった。本能が壊れているのかと思うほどに、今もほとんど異性を異性と認識していない節がある。
「でもそれで毎日お弁当もらうの、悪いんだけどなあ。すごく美味しくて嬉しいんだけど、わたし」
　最早完全に、食べ物でつられている。色気より食い気なのは間違いがない。普段は常に無表情な猫羽が、悠夜の前では恐ろしくにこにこしている。
「わたしよりユウヤの役に立てるヒトなんて、いっぱいいると思うけどな。いいお嫁さんが見つかるといいね、ユウヤ」
「必要ありません。あったらわざわざあんな詭弁は使いません」

　いかにも他人事のように、あまりに平和な姿に少し腹が立った。人間界での猫羽は特に、御所にいた頃よりも無防備な顔で笑う。

猫羽の髪はある時を境に、幼少の黒から人間にはない紫苑色に変わった。猫羽が悪魔に負けないように、紫苑の気を纏う霧の精霊が守護に憑けられた結果だ。
日本で怪しまれないために、人間の目には黒髪に見える暗示を施された媒介の蜜柑色のリボンが、神秘的な紫苑色のツインテールの上で揺れる。以前より紅く染まった魔性の目には、髪の色もリボンもよく似合っていた。
「貴女のような悪魔使い以上に、利用価値がある人はそうそういませんし。足手まといの誰かを政略で押し付けられるのは僕はごめんです」
ぴしゃりと言うと、そういうことなの？　と首を傾げている。悪魔使い以上ってなんだろ、と真剣に考え込み始めてしまった。

猫羽は昔からそうだった。御所では愛想を振りまく悠夜が、猫羽には厳しく当たっても気にしない。二歳の年の差があっても平気でタメ口を使ってくる。
「.....本気にしないで下さい。悪魔使いなど不要だと、随分前にも言ったはずです」
「でも確かに、ユウヤのお嫁さん、強い人の方がいいと思うよ？　ユウヤは体が弱いし、呪術を使ってる間、ユウヤを守れる人でないと」
「必要ありません。早く全部食べて下さい、暑いから教室に戻りたいんです」
「あ、ごめんね。うん、急ぐね」
考えて食べる手が止まっていたところを、いそいそと従順に悠夜の言う通りにする。
御所では策謀を巡らせる悠夜は、不意に、こんなに率直に話ができる他人は猫羽くらいだと悟って愕然とした。
敵対者をどう巧く動かすか、日々の仕事をどうこなすか、ここでは何も考えなくていい.....その都合の良さは最早、猫羽の魔性だった。

こっそりと人形の頭をすげ替えるように、悠夜は常に、人々の良識と悠夜の視る世界の間をとって過ごした。悪いことはしていないはずなのに、いつも何かから隠れていた。
それを身内は、悠夜の優しさだと言った。保身のための打算であろう行動を、猫羽も昔、眩しいものを見るように言ったものだった。
――ユウヤは、偉いね。自分のことも、人のこともちゃんと考えてるね。
最初からわかっていた。猫羽であれば、詭弁に利用しても文句は言わない。だからその名前を選んだ。
身内がそれを善意に解釈し過ぎなのだ。当の猫羽は何も思わず、悠夜に見せる態度は今までと何ら変わるところがない。そもそもずっと、猫羽は悠夜の役に立つことを願っているから、こうして勝手に利用されても気にする様子が微塵もない。
だから全ては、悠夜の計算通りのはずだ。まさか人間界に来ることになるとは思わなかったが、御所の謀略（はかりごと）から一時的にでも解放されたのは確かだった。
それでどうして、こうもイライラとするのだろう。今も純粋な心を持つ猫羽が、魔性の紅い目で笑うほどに、悠夜の胸の奥が苛（さいな）まれる。

――……ユウヤ、怒ってる。
　教室に戻りたいと言っておきつつ、午後はさぼって屋上で空を見上げた。寝そべる頭に昔、しょぼんと悠夜を見ていた猫羽の顔がふっと浮かんだ。
――……ごめんね。またユウヤを困らせたね。
　猫羽があんなにも、純粋な人間でなければ良かった。猫羽の存在はいつでも悠夜の闇を暴き、そのまま受け入れる魔物だった。

　悠夜は人間界では、夏休み明けから高校に転入した。その前に七夕に一度、猫羽を訪ね、それから夏休み期間は人間界に慣れる時間を持った。
　猫羽のように純粋な人間は、人外の化生に付け入られやすい。悠夜達に出会う前は悪魔のために動いていたし、直近の七夕では猫羽を守るはずの霧の精霊に魅入られ、無自覚に乗っ取られていて冷や冷やさせられた。
　だから両親が、猫羽のためにも人間界に行こうと言い出した時、あえて反対はしなかった悠夜だ。一時のことであるし、両親自体、一緒に暮らせている時間がとても短いのだから。
「それも猫羽さんの人徳ですかね……父様、猫羽さんには特に甘いですからね」

　猫羽の兄は従姉の鵜の連れ合いなのだが、確かわざわざ、猫羽を見守るためだけに人間界に来ていたはずだ。従姉もその支援をしており、多くの者がそうして猫羽を守ろうとしている。
　そんな猫羽を、悠夜は今後も利用するのだろう。悪魔使いとして特別仕事を手伝ってもらう気はないが、悠夜が何か言えば素直に従い、また猫羽の名を出せば人を動かせる、都合の良い相手であることには代わりがない。
　だから完全に悪魔になられたり、精霊に変わられたりすると困るだけだ。見ていてイライラするのはそのせいだと思えばいい。利用しやすいから選んだ人形。その頭は悠夜以外にはすげ替えさせない。

　特にすることがない帰り道、七夕の時に訪れた公園に寄った。すっかり生きる世界を変えられた悠夜が吐いた溜め息は、夕闇の霧に消えていった。

＊　＊　＊

-INFORMATION-

★ 2023.2.2：本作公開 (https://puboo.jp/book/134653)
☆ 2023.2.14：ネタバレ「橘診療所」追加
☆ 2023.2.24：本作の源流『迷探偵猫羽のよろず事件簿』を別作でパブー掲載
★ 2024.2.14：「神探シ-裏編-」を『迷探偵猫羽のよろず事件簿』から本作へ移動
※「神探シ」で裏編ルートの場合『ツキモノ -白-』に続く END となります

★ 2023.2.22-3.14：星空文庫に本作のパラレル原作掲載 (https://slib.net/a/25945/)
『探偵に悪魔は反則です』(続編内に「神探シ」ノーマル END 収録)
『探偵に天使は味方です』(「神探シ」ノーマル END 以後の続編です)
※本作は「有り得なかった夢」の橘診療所シリーズで、星空文庫版は本作とは過去が違います

神探シ　-裏編-

　大切なことを忘れちゃった。
　忘れちゃったことそのものすら、忘れかけてることに気付いて、わたしは不意にすごく不安になりました。
「.....なに、これ？」
　気が付けばもう、時間はお昼。閉め切ったカーテンの薄暗い部屋で目が覚めます。
　高校が夏休みに入って、ゆっくりし過ぎちゃったみたい。
　何かがおかしい。でも何がヘンなのか全然わからなくて、とりあえず部屋をきょろきょろ見回すと、あんまり使ってない机の上に、水の無い花瓶が置いてあることに気が付きました。

　生けてあるのは、名前も知らない乾いたお花の枝。
　もうすっかり、わたしの飾り気のない部屋に馴染んだドライフラワー。水葵がここに引っ越してくる時、片付けた兄さんの部屋で見つけた不思議なお花。
　あれ、でも.....わたしはどうして、これが気になったんだっけ.....？

　一瞬、鏡に映る私が、悲しいみたいに顔を曇らせた気がしました。
　ヘンなの。まるで鏡の私が、わたしの代わりに悲しんでるみたい。
　でも気にせずに、ちょっと寝覚めのお散歩でも行こうかな。
　異世界にいた私には、人間世界の空気ってまずいよ。でも、昔からお散歩は好きだから、最近お気に入りの公園でも行こうと思います。
　新しい生活、新しい世界。
　そろそろ慣れてきたし、思う存分、楽しんでいきます。

＊　＊　＊

　今日はお休みだけど、夕方からはいつも通りバイトがあるから、受付け用の制服を着て出ました。洗濯したばかりだし、公園で汚さないようにしなきゃ。
　紫陽花（あじさい）がキレイだったその公園は、わたしのマンションから高校に行く道の途中にあります。
　元々は、馨おにいちゃんと一緒に、迷宮入りになっちゃった事件の探索に来たんだ。結局何も手掛かりはなくて諦めたんだけど。

「うん……さすがにもう、咲いてないよね」
　梅雨になるまで、何のお花も咲いてなかったから、わたしは毎日素通りしてたんだけど。
　夏休み中の今は、太陽がじんじん暑くて、他の植え込みの木もみんなしんどそう。それだとちょっと味気ないので、わたしは部屋からお気に入りのドライフラワーを持ってここまで来ました。
　このお花も多分梅雨の花だって、水葵が言ってたっけ。でも水葵、今も捨てろとうるさいんだよね。確かにすごく色褪せちゃってるけど、ドライフラワーってそういうものじゃないのかな？
「……何でかな。わたしはこれ、すごく好きなんだけど」
　高校くらい広い公園に入って、日陰のベンチを探して座ります。
　紫陽花が咲いてた頃に、それももらって帰れば良かったね。隅の方にある管理室の人がいる時に、上手く頼めば大丈夫なんだって。
　来年はもう、わたしはいないしなあ。高校にいるのは一年だけだから、紫陽花のドライフラワーは作れそうにないね。と言っても作り方もわからないし、調べ方もわからないんだけど……。

　今まで別に、そんなにお花が好きな方ではなかったんだけど。
　もっとしっかり、森の匂いがする方が良かったから。でも公園の中の小さな林は、あんまり良い感じがしなくって。それなのにこのドライフラワーや紫陽花は、見てるだけで、どうしてか落ち着くんだ。
　ドライフラワーを隣に置いて、まだちょっと寝ぼけたままの頭で、ぼけっと座って園内を見つめます。
　人が全然いない公園。そういえば水葵、ここにもあんまり来ちゃ駄目って言ってたっけ。わたしは好きなんだけど、何でなのかな？
　何かと小言の多い水葵が里帰り中だから、わたしはのんびりここに来たかったのかも。
　木陰はとても涼しくて、汗をあんまりかかずに済んでます。わたし、部屋についてる「くーらー」が苦手なんだ。電気代もかかるし、ここにいる方が節約になるよね。

　それにしてもここは、ひんやりし過ぎな気もするけど。
　まるでそれは、人間のいるべき領域ではないような冷たい違和感で……だから気になって、何度もここに来たんだっけ。
　水葵が止めるのもそのせいなのかな。
　そう思い当たった矢先に、その「なぎ」が不意に林の方に見えて、あれ、とわたしはベンチから立ち上がりました。
「何で……里帰りするって、言ってたのに……」
　それでなくても人がいないのに、傍目からも見えにくくなる雑木林。そこに水葵は消えてっちゃいました。

　でもおかしいな。水葵の気配、全然してないよ？　　何だか狐につままれたみたい。
　見つかって色々言われるのもいやだし、深追いしないでおこうと思ったら、間が悪いことに、急にぽつぽつと小さな雨が降ってきました。

「あちゃあ……天気雨だ……」
　狐さんのことなんて考えたのが悪かったみたい。受付けの制服を汚すわけにいかないから、林の中にあるはずの屋根のある休憩所に行かないと。
　この時のわたしは、それが運命の選択に続くなんて思ってもみませんでした。
　ベンチに置いてたドライフラワーを持って、水葵が消えていった林の中に、休憩所を目指して歩き始めます。

　公園から直接見えない林間で、畳のベンチがある和風の休憩所には、一人だけ先客がいました。
「え……な、ぎ……？」
「……」
　さっき見えた水葵が横向きに座って、休憩所の外の林を見つめてます。
　わたしが来たことには気付いてる。なのに何も言わないし、そもそも水葵の気配がしてないし、姿が同じだけの違うヒトなのかな。

　わたしを見守ってくれる悪魔の水葵。
　でもここにいるのは、高校もないのに制服姿で、何だか物寂しそうに小降りの雨を眺めて、いつもの覇気が全くないそっくりさんでした。
「あなた……誰？」
「……」
　休憩所に入って、水葵と垂直になる壁際のベンチにわたしも座ります。
　外を見てたそっくりさんはわたしの方に向き直って、透き通る青の目をしっかり合わせると、とてもキレイに笑いました。

「……そういうあなたこそ、誰？」
「――え？」
「何がいったい、あなたがあなたであることを決めるのかな。……誰がいったい、あたしがあたしであることを知っててくれるのかな」
　ほんとにヘンです。声は似てても、口調が全然水葵とは違うそっくりさん。
　やっぱり水葵じゃない。でも知ってる気がして、そしてそっくりさんも、わたしのことを知ってるみたいでした。

「どうしてここに来たの、サツリクの天使さん？　あなたはまだそんなにも、神様に仕えたいの？」
「……え……？」
　胸がどきどきと、わたしに警告を鳴らし始めました。
　あれ、おかしい。わたしは多分、このままここにいない方がいい。
　わかってるのにそっくりさんから目が離せなくて、休憩所のベンチに釘付けになっちゃいます。

　サツリクの天使。それは確かに、わたしが人間に戻る前のお仕事です。
　でも今はもう、何の関係もないはずなのに……どうして水葵のそっくりさんは、わざわざこの人間界にいるわたしに、そんなことを言うんだろう……？
　水葵はしない妖しい笑顔を浮かべるそっくりさんは、長くてまっすぐな青銀色の髪をかきあげながら首を傾げました。
「あなた、前にも無意識にここに来たでしょ？　それであなたはあなたでなくなったのに、まだまだ全然、懲りてないんだ」
「……えええ？」
　あれれ？　わたし、この休憩所があることは知ってたけど、中に入ったのは初めてのはずだけどな。
　それに、わたしでなくなったって、どういうことかな？　水葵は確かに、六月の終わりからわたしがおかしかったって、だから気を付けろと言ってた気はするんだけど……。

「そろそろ種明かしをしちゃおうか。この、有り得なかった世界の夢を」
　そっくりさんがいきなり立ち上がりました。びくっとするわたしの前に来て、後ろ手を組みながら体を少し傾けてわたしを覗き込みます。
　わたしの直観は、ただ一言だけ。あ、このヒトが犯人さんだ。
　でも何の犯人なんだろう。それに、有り得なかった世界って何だろう。
　わけのわからないことだらけで、探偵見習いのわたしも全く歯が立たずに、ドライフラワーを握りしめながら固まっちゃいます。
「有り得なかった……世界？」
「そう。梳時雨（うつぎしぐれ）が自分と相方を消してまで、大切なヒトを助けた世界。でもそれは、彼に都合が良かったとしても、みんなが満足とは限らないの」
「シグレって……兄さん……？」
　もうわたし、そっくりさんがあんまり言葉足らずなので、圧倒されるしかありません。言ってることも全部、さっぱりわかりません。紫雨（シグレ）も兄さんの前の名前で、今は山科燕雨（やましなつばめ）なのに。
　せめて直観でそっくりさんの意図を探ろうとするんだけど、こんなに色々込み入った気配のヒト、初めて観ました。兄さんはこの水葵のそっくりさんのこと、知ってるのかな、知らないのかな……。

「あたしも棯時雨も、『神』まがいであることを利用して時空を転轍している。時を渡る彼の直観には到底敵わないけど、あたしにもできることがある.....あなたのお母さんと同じで、運命を変えるためにここにいるの」
　わたしの母さん。本来の水葵が契約するはずの母さんが、そっくりさんと何の関係があるんだろう？
「母さんを知ってるの？　　どうして？」
「むしろどうして、わからないの。あなた、自分が誰か、本当にわかってる？」
「え.....わたし.....わたしは.....？」

　ウツギ・ネコハ。それがわたしの名前で、ウツギ・シグレは兄さんです。
　当たり前のことなのに、そっくりさんは何が言いたいんだろう？

「あたしはナギ・橘・アスタロト。『神』のヨメで、過去と未来をかいま見る怠惰な悪魔の適性者。一つの旅の始めから終わりまで、似ていながらも違う道順の差異だけがわかる.....あなたがどの道を間違えて、その結果、どんなことになってしまうのか」

　アスタロト。悪魔使いのわたしには初めて、すごくピンとくる悪魔さんの名前が出ました。
　それはもう、物凄く高位の悪魔で、わたしなんてとても太刀打ちできません。
　そしてそれはわたしの母さん、流惟・棯・アスタロトがずっと、抗ってるはずの悪魔で――

「ルイもそうね。ルイのはあたしより煩雑過ぎるけど、血は争えない」
「え.....母さん.....？　　ナギ.....？」
　とりあえずわたし、そっくりさんが名乗った通りナギと呼びます。
　多分悪魔の適性を持つから、悪魔使いのわたしに語りかけてくるナギ。そこまではわかるけど、何を言いたいのかはさっぱりです。
「どうしてあなたはここに来るの。それは本当にあなたの望み？」
　でもとりあえず、ナギはそっくりさんの水葵と一緒で、わたしにここに来てほしくないみたい。それは「心配」のはずだと、それだけは感じ取りました。

「わたし、ここに来ちゃいけないの？　　.....ナギは何を、怖れてるの？」

　知らず、手に持ったドライフラワーを強く握り過ぎて、ひらりと一枚葉っぱが落ちていきました。
　それを見てナギが、キレイな顔の眉間に皺を寄せます。

「……それを持ってここに来たあなたは、選んでしまう。……あなたでなくなってしまう道を」
「――え？」
「止めても無駄なのはわかってるけど。このまま帰れば今まで通りだから、帰りなさい。忘れてしまったあなたに道はないの」
「……？」

　わたし……何かを忘れてるのかな？
　そう言えばさっき起きた時、そんな気がしてたような……。
「それでもあなたは……自分でわかっていなくても、それを望まずにはいられないのね」
　さっきまでの笑顔が嘘みたいに、ナギが哀しそうにわたしを見つめてきます。
　わたしは全然わかってないけど、でも、確かに今すぐ帰る気にはなれなくて……それが何でなのかも、よくわかりません。

「ええと……あのね、ナギ……」
　ナギが誰かも、わたしにはわかってないままだし。
　それでもわたしを心配してここにいるなら、わたしの言うべきことは一つでした。
「わたしの望みなら、何になっても……それは結局、私じゃないの？」

　一瞬、ドライフラワーに色が戻ったように見えました。
　気が付けば天気雨はもうほとんど止んでて、でもそれは、前に立つナギだけを見るわたしには気が付けません。

　ナギはとても、厳しい顔です。
「それは欺瞞だって……悪魔使いのあなたなら、わかってるでしょうに」
　それでもわたしは、きっともう、忘れちゃってるから……何かとても大切なことを、忘れてしまったわたしそのものを。
「でもきかないのね、あなたは……自分に嘘をついてまでも守るのね」
　元々人形なナギのガラス玉の目に映るわたしは、とても紅い、悪魔さんみたいな目。
　それでわたしはほんの少しだけ、ナギが何を心配してるかがわかりました。

　いつかは悪魔を手放しなさいと、これまで何度もみんなに言われた悪魔使いのわたし。
　それは下手をしたら、ミイラ取りがミイラになってしまうから。
　わたしも悪魔になってしまうって、父さんも母さんも、兄さんと水葵の主人の氷輪くんもずっと心配してて……。
「だって、『私』は……もう一度、ただ、会いたくて」
　その時勝手に、ひとりでに出た声は、わたしのよく知る私のはずで……サツリクの天使だったわたしが会いたい、懐かしい誰か。

もう完全に降りやんでしまった、青い空の中での束の間の雨。
代わりに不自然な霧が、この休憩所の周囲にだけ立ち込めてきます。あれ、これって、前に紫陽花を見に来た時にも同じことがあった気がする。
「……お迎えが来ちゃったか。神苑に長居すれば、こうなることはわかりきってた」
なんとなく、ナギがわたしを守れるのはここまでなんだと、私にもわかりました。

何処かから、不思議な鈴の音が不意に聞こえました。
沢山の鈴を一緒に鳴らしてるみたい。それと同時に、わたしの周りの景色が霧に紛れてぐにゃりと歪んで、頭がくらくら、ふっと意識が遠くなっていきます。

あなた、誰――と。
目を閉じる直前にわたしは、水葵のそっくりさんなナギに尋ねました。
「ナギは……誰を探して、ここに来たの……？」
でも、わたしも……いったい、誰に会いたいんだっけ？
「兄さん……？　氷輪くん……？　それとも……――」
願っちゃダメって、本当はわかってた……でも、「私」は願ってしまった。
たとえそれで、わたしがいなくなっても、それは決してお別れじゃないから……。

ドライフラワーを胸に持ったまま、横向きに倒れるわたしの髪が何故か黒くなっていきます。ナギの視界から伝わってきました。
ナギは膝をついて、倒れ込んだわたしを見つめて、一度だけさらりと黒い髪をさわって……そのまま、わたしに覆いかぶさるように、ぎゅっと体を抱きしめてきました。

「……桃花（トウカ）……」

どうしてなのか、今までとちょっと違った雰囲気。まるでわたしの母さんにそっくりな声。
ナギもわたしも、二つの違う世界の記憶を持ってたことを、この時のわたしはもう覚えてません……。

＊　＊　＊

橘桃花。それはわたしが人間に戻れる前に、悪魔に殺されちゃった母さんのはずです。わたし、随分昔に攫われて、ただの人間からサツリクの天使になったから。
大人しかった昔の母さんが父さんに出会って、一緒に旅に出て、悪魔との戦いに巻き込まれてしまった。だから父さんは悪魔が嫌いで、母さんはその後悪魔になって、自分自身に抗い続ける状態になった。それがわたしの知る、悪魔になる前の「橘桃花」。

何処からかずっと、鈴の音が聞こえてきます。
桃花という母さんを思うわたしの心。それは違う、母さんは流惟だから目を覚ませって、わたしに訴えかけるみたいに。

胡乱な時のわたしがいつも、もがきつづける暗い水底。眠る時は必ず寒いここにいるから、特別わたしはびっくりしません。
でも今日は、随分長く目が覚めないな。そう思ってたら、急に水底に一筋の明かりが差してきました。全く初めての、知らない誰かの声と一緒に。
「……それは違うでしょう。棯流惟(るい)はどの世界であれ、最初から桃花の名前――本質を隠したはずよ」
紫陽花の公園で倒れ込んだはずの、ベンチの畳が不意に手に触れます。
その感触を道しるべに、わたしは急速に水面に浮き上がっていきます。
「誰もあたしに、気付くことなんてない。それで良かったから――あたしはわたしになったのに」
母さんにそっくりで、でも母さんより幼い雰囲気の声。
わたしがやっと、横たわる畳で目を覚ました時、そこにはびっくり……全く知らない和室の部屋で、障子の向こうは真っ暗な場所で、わたしは眠りこけてました。

……あれ、わたしがいたのは、畳のベンチじゃなかったっけ？
それにさっきまで、わたしの前にいたのはナギのはずなのに……横向きに眠るわたしの前で、じっと正座してわたしを見てたのは、短い黒い髪の小さな女の子でした。

水色のパーカーとミニスカートを着て、石竹色のリボンで尻尾髪を少しだけまとめた女の子が、わたしにそのまま話しかけます。
「また来たのね、貴女。それで、こたえは見つかったのかしら？」
「――え？」
女の子はどうしてか、わたしがさっきまで持ってたドライフラワーを持ってます。
しかもそれが、すごくキレイに、元々咲いてた頃みたいな白い花になってるの。でも花びらの内側はうっすら赤くて、ちょっと血の色みたいにも見えて、ドキっとしてしまいました。

　知らない和室で起き上がって、知らない女の子に話しかけ返します。
「わたし……ここに来たこと、あるっけ？」
「……――」
「えっと……あなたは、誰？　ここは、どこ……？」
　大切なことを忘れちゃった。それってひょっとして、これのことかな。
　わたしは全然、この和室に来た覚えはないのに、女の子は確かにわたしに会ったことがある感じ。短い髪以上に真っ黒な目を、不審げに細めてます。

「……選択の話をしたでしょう。それを選びに来たんじゃないの？」
「え……選択？　それって、何のこと？」
「……当ててみたら。貴女、探偵なんでしょう」
　わたしが探偵見習いなことも知ってる女の子。それどころか、さっきまでの様子だと、わたしの母さんのことまで知ってる不思議なヒト。
　すごく無表情で、なんだかサツリクの天使時代のわたしまで彷彿とさせます。でも女の子が見てるわたしの姿は、さっき気が遠くなった時とは違って、紫苑色の髪のままだね。

　わたしはさっきまでのナギとの話も合わせて、全然わからないこたえを考えるしかできません。
「ええと……多分、あなたが来たっていうわたしは、違う世界のわたしだと思う……」
「……」
「ごめんなさい。わたしは全然、あなたを知らない。ずっとナギと話してたはずなのに、気が付いたらここにいて……何が何だが、さっぱりわからなくて」

　黒髪の女の子は、わたしが嘘をついてないとわかって、ふっと手元のお花に目を移しました。
「……そう。それならきっと、この谷空木（タニウツギ）のせいね」
「え？　たにうつぎ？」
「前情報なしに、神界への接点だけを持ってしまったのね。わたしを知らないなら、貴女はここに来てはいけなかった」
　女の子はちょっと悩ましい顔です。わたしより年下の、良くて中学生くらいに見えるのにしっかりしてそう。
　それにしても、シンカイって……？　まさか、神様の世界……なんてことは……？
「それだと貴女は選択できない。それでもここに来てしまったのは……それが貴女の選択だったわけか」

へ？　と、ずっと意味のわからないわたしが呆ける間に、女の子がお花を手の平に乗せます。
それは突然、思いもかけない姿へと変わりました。
「……えっ……!?」
そこにあったのは、真っ白な中にひたひたと赤い血を溜める、まるで……抉り出されたばかりの、ヒトの心臓……――

手品でもないのに、お花を突然心臓に変えてしまった悪趣味な女の子に、わたしは吐き気をこらえて口を押えました。
女の子は少しだけ気まずそうな顔で、心臓を差し出したまま、感情を乗せない声で話し始めます。
「貴女は時雨と、氷輪汐音（ひわしおん）を連れ戻しに来たのでしょうに。そもそも貴女が二人を忘れたのなら、これは意味を成さないものになる」
「選択の話」と、さっき確か、女の子が口にしました。
この心臓はどうやら、それに関係してることみたい……？

「わたしは橘桃花。わたしがいるから貴女は存在する――貴女を守り続ける混沌の管理者」
「……え？」
毎夜、わたしが眠りにつく度に堕ちる暗い水底。
それはサツリクの天使だったわたしが、沢山のヒトを殺した罰で――それでもわたしが人間に戻れた、「命」の「力」をくれる宝でもあります。
「そしてあの谷空木は、時雨が奪ってきた氷輪汐音の心臓との接点。でも時雨も汐音も貴女に忘れられて、ここに現れることができない。それならこれは……この心臓は、貴女かわたしが何とかするしかない」
氷輪くんの心臓。そう聞いただけで、ぞくりと、わたしの全身に悪寒と吐き気が走りました。
それって、どういう、こと……？　水葵と兄さんに力を貸せる氷輪くんは、今もずっと……天にある国で、番人さんをしてるはずなのに……。

「それ……氷輪くんに心臓は、返せないの……？」
「貴女の知る氷輪翼槍には必要がない。それでも貴女が谷空木の接点でここに来た以上、貴女はこれを求めてやって来たはずなの」
どうしよう、まるでわけがわからない上に、わたし、すっごく怖いです。
氷輪くんの心臓。今にも血がこぼれてきそうな生々しい色。
「情報が足りなさ過ぎるわ。それじゃ、探偵失格ね」
ここでわたしが、何か変なことをすれば、氷輪くんは死んじゃうのかもしれない。そしてそれは、氷輪くんに仕える兄さんにも影響が及ぶこと。トウカは多分、シグレ――

兄さんのことも、氷輪くんのことも、助けようと思ってくれてる。

――むしろどうして、わからないの。

　わたし、どうして忘れてたんだろう。悪魔に殺されて、棯流惟という悪魔として蘇生した母さんが橘桃花。そうして、母さんを悪魔にしてでも助けたヒトが、橘診療所の凪だったのに……。

「……ここで貴女にできることは、一つだけでしょう。棯猫羽」
「……」
「わたしと貴女、どちらがそれをしても同じ。もう選択はできない――貴女がここに来た時点で、道は既に定まっている」
　今のわたし……何もわからないわたしにできること。
　わたしは悪魔使いです。そしてこの心臓は、吸血鬼である悪魔の、氷輪くんの心臓なんだから……。
「貴女が契約するの。たとえそれで、貴女が悪魔になったとしても」

　そうして、トウカは黙って、私にその心臓を手渡してきました。
　温かくも冷たくもない、不思議な感触。
　本当にこれが氷輪くんの心臓なのか、それもわたしにはわからない現実。
　それでもトウカが、嘘を言ってないことだけはわかる。
　むしろ私は、このために来たんだ。母さんと水葵みたいに、完全に属性が近い者同士の連携を除いて、悪魔と契約できるのは人間だけだから……それは悪魔が仲間を増やすための、淋しい願いだから。

「……私は、悪魔になってもいいよ」

　きっとわたしが、「選択の話」とかで散々悩んで、その末に出したこたえの一つ。
　それを忘れてしまうことも含めて、わたしの選んだ道だったんだ……。

「ええ。……さよなら、猫羽。……幸せに」

　無表情だったトウカが哀しい目になりました。
　なんとなくわかります。トウカはここで、わたしを包む暗闇に戻るんだ。わたしを守るために、一緒に水底に沈むんだって――
「風漓（かざり）に伝えて。これで風漓が『神』として戻れても、それでも時雨……本当の烙人（ラクト）の影には、もう会えないのだと」

　最後に急に、わたしの中にいる、精霊のおねえちゃんのイメージがトウカに浮かびました。
　それは元々黒髪のわたしに、紫苑色の髪をくれた霧の泉の精霊で……悪魔からわたしを守るために、おねえちゃんの双子のラクトからもらった聖なる霊だったのに。
「時雨もあたしと同じ。いつも誰かのそばにいて、誰かの真似をしているの。風漓が出会う時雨は、もう時雨ですらない、まがいものの烙鍍（らくと）」

　そっか。「カザリ」が、紫苑のおねえちゃんの名前なんだ。
　サツリクの天使だったわたしが悪魔になれば、精霊のおねえちゃんは「神」になるってこと？　　それとも私がここに……神様の世界に来たからなのかな？
　それじゃまるで、わたしはおねえちゃんを探しにここに来たみたいだね。トウカの真意は何だか、そこにある気がする。

――どうしてここに来たの、サツリクの天使さん？

　そう言われたら確かに、わたし、紫苑のおねえちゃんにも会いたかったよ。これで会えるなら、ここに来て良かったって、そう思えるな。
　でも、それを本当に望んだのは……もしかしたら……。
　そんなことを思いながら、そこで唐突に、わたしの意識は途切れたのでした。

＊　＊　＊

　大切なことを忘れちゃった。
　忘れちゃったことそのものすら、もう忘れてることに気付いて、私は不意に凄く哀しくなりました。
「……なに、これ？」
　気が付けばもう、時間は夕暮れ。効き過ぎたエアコンの肌寒い部屋で灯りをつけます。
　高校が夏休みに入って、勉強ばかりし過ぎちゃったみたい。頭が何処かとろんとして、硬い机に伏せるとそのまま眠ってしまいそうな気がしました。

　ウツギ・カザリ。
　立ち上がってクローゼットを開けて、扉の内側についている鏡を見るまで、真っ黒な髪の自分の名前を思い出せずに困りました。

「……どこに、いったの……？」

どうして私、一人で勉強なんてしてるんだろう。
前からいつも、誰かが私の中に一緒にいるのに。でも、誰がいてくれたのか、それが何も浮かんできません。
何かがおかしい。でも何が変なのか全然わからなくて、とりあえず部屋をきょろきょろ見回すと、本を積み上げた机の端に、水の無い花瓶が置いてあることに気が付きました。

生けてあるのは、タニウツギという名前で乾いた花の一房。
それを見てやっと、私――棯文漓（カザリ）の頭に、ここ最近の生活の記憶が戻ってきます。

夏休みの内に、猫羽ちゃんの家族を説得しに里帰りするね。
そう言って、少し前から私の中にいる天使の紫音（しおん）が故郷に行ってから、私は一人になっちゃったんだね。
おかしいな、紫音、何しに帰ったんだろう……？　紫音がいないだけで、どうして私、こんなに不安になるのかな……？

紫音は烙鍍（らくと）が、私の高校生活を見守ってくれるように頼んだ月光の天使です。元は悪魔なんだけど、私に仕えることで天使になったの。よくわからないけど、私が紫音の神様みたいなものなんだって。
私、本当は一年高校に通うだけだったんだけど、もう少し人間世界にいたいと思っちゃって。双子の烙鍍はそれを心配してくれたんだ。

「……あれ。何で……天使なんだっけ？」
私を見守ってくれる天使。それは本当に……紫音で良かったんだっけ？

カーテンを開けると、窓際の机に光が差し込んで、花瓶の花がよりいっそうはっきり見えました。
もうすっかり、私の本だらけの部屋に馴染んだドライフラワー。お気に入りの公園から分けてもらった、キレイな紫陽花。
あれ、でも……さっきここにあったのは、紫陽花のドライフラワーだったっけ……？

一瞬、鏡に映るわたしが、猫みたいな紅い瞳で微笑んだ気がしました。
ヘンなの。まるでわたしが、紫音の代わりに悪魔になったみたい。
でも気にせずに、早く夏休みの宿題を終わらせてしまおう……。

異世界にいた私には、人間世界の勉強って大変。でも、昔から本を読むのは得意だから、何とか追いついていこうと思います。

新しい生活、新しい世界。

余計なことは考えずに、思う存分、楽しんでいきます。

迷探偵猫羽のよろず事件簿　『神探シ』-裏編-　了

To be continued『ツキモノ -白-』.

橘診療所 -BlueRosary-　※ｼﾘｰｽﾞﾈﾀﾊﾞﾚ

○Ｘ－Ｃ日：雨久花

今時珍しくもない、異世界と日本をつなぐ中継地点。橘診療所の外来室は、数多の異世界と繋がっている。勿論、異世界などというものがあること自体は、人外と呼ばれる存在以外は基本的に知らない。

様々な世界から患者が来るが、誰もほとんど、診療所が異世界とは思っていない。どの患者たちの世界にも片隅にあるだけでなく、橘診療所の実際は、並行した時空すら稀に繋げる交差点でもあった。

誰がどの時空出身であるか、黒ずくめの院長の神眼を以てしてもわからない時が多い。それでもその日の急な訪問者は、いたってわかりやすい相手だった。

「通ります、忌々しい腐った蠅（はえ）の悪魔。緊急事態なので文句があるなら我が君にどうぞ」

院長の嫁、橘ナギと同じ姿をしながら、立て板に水で悪態をついて外来室のドアを叩き開けた者。漢服に似た足まである着物で、ずかずかとカーテンの向こうを通っていく、青銀色の髪をした鋭い美貌の人形。この悪態は悪魔の水葵（なぎ）だと、院長は見当をつける。

水葵は、別々の時空で院長の嫁と同じ人形を使う悪魔だ。それ故に嫁と瓜二つながら、水葵である人形は院長を毛嫌いしているので軽く息をつく。灰皿から煙草を取り上げてくわえ、机に肘をついたまま煙と共に声を返した。

「別にお前さんが、自ら遠慮してるだけだが。いつでも好きに通ればいいだろ、海竜」

それより「緊急事態」とは何かと少し気になった。我が君、という単語を出しているので、水葵には主君で、ナギには元部下の吸血鬼におそらく何か事件があったのだろう。

「何なら、治療の用意をしておいた方がいいか？」

「余計なお世話です。『黄輝（おうき）』と『黒魔（こくま）』の翼を併せ持つ我が君が瀕死であるなら、あなたにできるようなことは特にありません」

水葵はそう言うが、以前もその吸血鬼は心臓穿孔の大怪我を抱えて運び込まれた。何かと流血沙汰に合いやすい星回りらしい。前回は傷口が綺麗だったのでありあわせの治療で済んだが、まさか今回は心臓そのものを失うことになるとは、院長も水葵も知る由はない。

○X－A日：Lost Hexagram

お前なあ……と。ドアを開けて力尽きた相手に、寝間着に白衣の院長はしゃがんで頭を抱えた。
水葵の主君。例の吸血鬼が胸に大穴を開けて、夜明けに外来室に倒れ込んできた。
「よくこれでここまで辿りついたな。連絡をよこせば迎えに行ってやったのに」
「あははー……アンタの忠告通りの事態になったから、なんか、意地になっちゃってさあ」

昇り始めた朝の光で、体の端々が焦げて、ぷすぷすと煙をあげている吸血鬼。
以前と違い、背の羽を二枚失っている。おそらくその羽を媒介に何処かから魔力を調達し、何とか体を保っているらしい。それでも心臓のない全身は最早消滅寸前だった。
「変な気を起こした相方に殺られたか。わかりきった結果だったな」
「わかりきってなーい……汐音（しおん）が隙をみせたのは、けっこー誤算……」

診察台に使い捨てのシーツを敷き、とりあえず吸血鬼を抱き上げて寝かせる。煙草に火をつけてから、傷を押える手の間で懐を探り、「黄輝」と「黒魔」という二つの石を取り上げた。元は吸血鬼の翼の核にされていた、世界を崩壊させられるレベルの宝だ。
「前回は怪我が治るまで『黒魔』を胸裏に埋め込めば何とかなったが、今回は心臓そのものがないときたか……ということは、汐音の意識は、『悪神』な相方が連れていったか」
「アタリー……何でばれたのかなぁ、汐音だけは心臓にいるって……」

そもそもこの吸血鬼は、数多の翼に宿る複数の心が、翼の生える体を動かしていた悪魔だ。それが一人だけ、翼以外に宿る意識の主があったことを、吸血鬼本人ですらこうなるまでは確信できていなかったというのに。

「どっかで一度殺されたんだろ、既に。お前の心臓を潰したら汐音が消えて、慌てて元に戻した時空でもあるんじゃないのか」
「あ、なーる……それで微妙に、心臓を外したのか、教会に行く前のやつは……」
「水葵を呼び出したのはその時か。あれから結構時間がたってる気がするが、その間、まるで手をこまねいてたのか？」

苦い顔で見下ろすと、吸血鬼も珍しく困ったように笑った。今後もこの体を使っていくには、今回ばかりは致命的だとわかっているようだった。
「『黄輝』を心臓代わりにする力の余裕すらないな。ひとまず『黒魔』を補助に、両方共胸に埋め込むが、誰か『黄輝』を扱える鍵がいなければ、もう再起は不可能だと思え」
「うん、さんきゅ……それなら、『地』の番人くらいはできるかな……寝たきりでいけば……」
「……」
「地」の番人。吸血鬼が持つ二つの宝の、祭壇である天国を本来吸血鬼は守り続けていた。
自らが生きる力を奪われ、残った手段を全て振り絞って診療所に来た吸血鬼。その目的は純粋に己の役目を果たすことで、そんなことしか考えていない微笑みはバカの一言だった。
というよりは、それしか考えられない限定された用途の命。もう声を出すのも限界な体の青白い目に、最後にはおそらく顔を歪める院長が映っただろう。

「……ゆっくり休め。お前が守りたいものを、全て守るために」

番人の役目――天の国に鍵をかける死神。誰かの都合のために生み出され、誰かの都合で眠りゆく吸血鬼。どの時空の彼に出会っても、おそらくはそうなるのだろう。
吸血鬼の元上司たる嫁のナギに、何と言い訳するかを考えながら、ふーっと長い煙を吐き出す。意識を失った吸血鬼の服を切り、しぶしぶ処置を始めた院長だった。

○X日：橘診療所

眠りについた吸血鬼の、心臓を奪った相方だった者。それとは違う時空の同じ存在である山科燕雨(やましなつばめ)が、夜更けに外来室に飛び込んできたのは、吸血鬼の退場と無関係ではないようだった。

時空が違うので、「山科燕雨」が診療所を通った先の、帰る世界には何の負傷もない吸血鬼がいるはずだ。だから急いで帰ったところで、先日心臓を失った吸血鬼とは会えない。また「山科燕雨」自体吸血鬼の相方でもなんでもないのに、ヒトの縁(えにし)とは不思議なものだ、と院長は思わず居室でぼやいていた。

「おまえの言う通り、出会い方が違っても、まとまる縁はまとまっていくのか.....ナギ」

外来室より奥の居室では、狭い仕事机の上に、嫁である方の人形がでん、と居座っていた。

この居室では、端の扉の向こうにも、ずっと閉じ込めている違う時空の元嫁がいる。そんな自らの状況も加味して、しみじみと煙草を取り出すが火は諦める。

悪魔の橘水葵と同じ人形を使う嫁は、水葵がお勤めで通う高校の制服を今回は着ている。その人形の顔はどの時空でも、くだんの吸血鬼の縁者である女性の骨が原料のため、ほぼ同じ容姿に造られている。

そのため、吸血鬼が女性化した美貌の人形で、端整な鋭い視線で嫁が微笑む。

「よくも散々邪魔をしてくれたわね、灰(かい)。どうして貴男があたしをはめたの？　あたしが汐音(しおん)の救援に行けないように、時雨君とグルになるなんて」

「違う、誤解だ、不可抗力だ。水葵が通った時には俺に何の説明もなかったし、氷輪翼槞(ひわよくる)が使いものにならなくなった時空は、道を教えれば怒るだろ、おまえ」

「そうね、おかげで怒りが三倍になったわ。仕方ないから、向こうの部屋のあたしにも手伝ってもらって、もう一度時空を焼き直そうかしら？」

「やめてくれ、頼むからあっちの凪(凪)にはかまわないでくれ。どれだけ骨折って大人しくさせてると思ってる、あいつ」

どちらの嫁も、言ってみれば霊魂と天の翼だけの存在。フリーに動く時には悪魔として人形を使い、本体は堕天使である目前の新嫁(ナギ)と、妖狐の体を失ったことで炎獄の天使となり、暴走を続けるために閉じ込めた元嫁(凪)。

簡単に言うなら、目前の堕天使のナギは狂気寸前、奥の部屋の凪は狂気の天使だ。そもそもこの診療所を建てたこと自体、奥の部屋の凪にそそのかされての気の迷いだった。

数多の世界と時空に繋がる特異点。そこにいることで院長は多重の自身の、全ての現状と記憶を抱える羽目になった。診療所自体の起源は奥の嫁曰く「有り得なかった夢」だが、凪を閉じ込めてから院長は新たにナギと出会ってしまった。それすら実は凪の目論見通りで、凪と共に沈められた時空の代わりに、ナギの時空が主流になったと言っていい。

そのように、この時空の特異点から何かすることは非常にリスクが大きい。だから院長は自分から動くことは滅多にない。本当は目前のナギにも出会いたくなかったのだが、診療所の出資者の娘が死病になったことで、出資者の守護天使になる運命のナギと顔を合わせることは避けられなかった。

堕天使のナギは、主に氷輪翼槍の後ろ盾として、山科ツバメも巻き込む様々な謀略を巡らせていた。

「御託はいいから、さっさとあたしをツバメくんに会わせなさいよ。ツバメくんを戻すために必要なモノはわかってるのよ」

「だから、これ以上は、おまえ……おまえのその夢視、つくづく、なければ良かった……」

ナギも凪も、運命の岐路――時空の差異を夢に視てしまう、類稀で特殊な感覚を持っている。そのため運命を変えようとして、自らの体を実の娘に差し出したり、もう一人の娘を悪魔の養女にしたりと、傍目には理解し難い奇行に走った。いつまでも苦しみ続ける凪を、安らぎのために時空の狭間に閉じ込めたと言っていい。

なので目前のナギにも、できれば院長は大人しくしていてほしい。けれど今回、ナギのお気に入りの氷輪翼槍が壊された以上、黙ってはいられないはずだった。

俺はいったい、この件に関して、何か一つでも悪いことをしただろうか。院長の切実な問いは尽きない。

○七夕：迷探偵猫羽の乙女事件簿

氷輪翼槞が退場したことに絡み、別の時空の山科燕雨が現れる運命の交差が起きてしまった。ついでに燕雨の妹の猫羽――院長は山猫と呼ぶ少女にも、時空の差異の影響が現れ始めた。

氷輪翼槞は害ある存在から極力猫羽を守っていたため、それがいなくなり、一番大きな変化としては、猫羽の内に在る霧の泉の精霊が動き出したことがあった。

「あの精霊、悪気は本当にゼロなんだが、何分ここでは山猫本体の魂が脆弱過ぎる。悪魔の侵蝕から山猫を守る代わりに、精霊と山猫の方の境界がとてつもなく薄くなってきてる」

「はい、教えていただいた通りでした。今日、この目で確認してきました」

居室に招いた黒髪の少年が、診療所で借りた学生服をたたみながら院長にぺこりと頭を下げた。煙草の匂いは嫌いらしく、適度な距離を保ったままでいる。

礼儀正しいその少年は、烏丸悠夜（からすまゆうや）という天才呪術師で、日本と同等に近い得意先の世界に住んでいる。そのため診療所に特殊な患者が来た時には、治療の手伝いを頼むことがあった。代わりに院長もこうして、様々な便宜を図っている。

「放っておけばいずれまた、今回のように山猫は自分から引っ込む。精霊は不遇な生前を過ごしてきたから、もう一度生きたいという願いが強いが、山猫に悟られないように必死に抑えてるな。氷輪翼槞の隠れファンだったから、アイツが山猫のそばにいる内は我慢もしやすかったんだろう」

「よくわかりませんが、翼槞君が猫羽さんのそばにいる場合は、彼女は猫羽さんの体を奪わないということですか？」

「まあ、そういうことだ。お前さんを呼ぶこの時空では、氷輪翼槞は『地』から長く離れられない。山猫につきっきりにはなってやれない――そして山猫は、自分が引っ込むことになっても、精霊が幸せになれることを願ってしまう」

悠夜はしばらく悩ましげに両腕を組み、難しい顔で俯いていた。しかし途中で何かに気付いたように、不服げな顔付きで、煙草をくわえる院長を改めて黒い目で見つめた。

「……でも別に、僕にはそんなこと、関係ありませんし」

「そうか。今日、ちらっと様子を見たが、山猫はおそらく長くないぞ」

「長くないって……人間界にいるのは一年だけでしょう？　戻ってくれば、さすがにそんなに簡単に……」

「俺の嫁の見立てでは、最速で夏休み一杯ももたないらしい」

　がっくり、と。ソファで袴に両手をついて、小袖姿の悠夜が俯いてしまった。
「だからあれほど、悪魔とは縁を切りましょう、って.....」
「どうなってもどの道山猫は精霊と生きる。悪魔がいようがいまいが同じだ」
　悠夜には教えていないことだが、時空によっては棯(うつぎ)猫羽は、様々な事情で院長の娘か縁戚になる。悠夜を特別に関わらせるのは、娘と言えるこの時空だけであり、母にあたる凪からの逆らえない指示だった。猫羽が院長の娘となる場合、その魂は他の時空とは違う危機に晒されるのだ。

　悠夜はその後、何も言わずに帰っていったが、猫羽が留学する人間界に行くために大胆な行動に出る。そのことをやがて院長も知る。

○盆前：探偵に天使は味方です

　棯猫羽が黒ずくめの院長の娘ではなく、ナギが堕天使であるほとんどの時空。そうした主流の世界では、猫羽は退場した氷輪翼槞を連れ戻そうとする。
　その連れ戻しが上手くいけば、院長の下には真の娘の桃花（トウカ）が帰る。閉じ込めた天使の凪はそう言って、ずっとその時を待ち望んでいるのを院長は知っていた。
「ただいま。悪いけど久しぶりに場所を借りるわ、灰夜（かいや）」
　院長の許可がないと開けられないはずの、居室のドアを不作法に開いて入ってきた黒い少女。
　真っ黒な髪を石竹色のリボンで小さな尻尾型に括り、漆黒の目が水色のパーカーに映えているが、小さな背には大きな黒い翼が二つ生えてある。更に後ろには、二人の気まずそうな人影があった。
「おう、来たか――桃花」
「残念だけど、もうそう呼ばれるには値しない。『桃花水』は今後も預かるけれど、あたしは『冥夜（めいや）』に戻る――ねえ、時雨？」

　少女に続き金髪の少年と、氷輪翼槞――にそっくりな青銀の髪の吸血鬼、氷輪汐音が入ってきた。
　「神」と悪魔の名を同時に持つ院長の居室は、一応神域の一つとされている。数多の世界の接点である場所を、少女がわざわざ「借りる」と言ったのは、神域であれば汐音がヒトの姿を取れるからだろう。今の汐音は氷輪翼槞の心臓に宿る、思念だけの存在であるからだ。

「……そうか。雨の加護も悪神の翼も、全て混沌に還しておまえが引き受けるのか」
「時雨には代わりに、汐音が翼として憑く。秩序の管理者は続けてもらうけど、彼が『悪神』である必要は別にないでしょう」
　淡々と言ってはいるが、それは少女こそが、今後の「悪神」を引き受ける末路だ。元は凪との間の娘だった少女（桃花）に、院長の顔はどうしても浮かなくなる。
「俺はかまわないが……管理者の今後の話となると、漣（さざなみ）の奴が文句をつけてきそうだな」
「大丈夫よ。それはあたしが話をつける」
「……おまえはそれでいいのか、桃花」
「ええ。もう十分、わかったから――どの時空を探しても、わたしの烙人（ラクト）には会えないって」

　そこでくるりと、少女は金髪の少年に振り返って笑った。
「だから自由になって。今までありがとう、時雨」
「.....」
　金髪の少年――汐音の相方ツバメが数歳若返った姿の時雨は、ただ沈痛な顔をして、少女を見つめ返していた。
「『時雨』の名前は、還してもらわないとだけど.....ごめんなさい。時雨を助けてはあげられなくて」
　普段はつれない顔付きの少女が、温かく微笑んで俯く少年の頬を撫でる。後ろで汐音が複雑そうに、ふーっと大きな溜め息をついていた。
「それでもアナタ達が、帰れる方法はあるのだから。汐音と一緒に、猫羽の元に帰ってあげて」
「.....トウカ」
「ありがとう。今まで一緒に、烙人を探す旅に付き合ってくれて」
　優しく笑う少女の背中で、ざわりと黒い翼が小さく広がる。
　それは本来、時雨の背にあった禍(わざわい)だった。そのままではいずれ相方である汐音も侵蝕してしまうから、少女が時雨の過去ごと引き受けるのだ。

　そうならない時空も実は存在している。堕天使のナギが目指しているのは、実際そちらに変わりつつある。今のところは、桃花が「悪神」を引き受ける未来が一番無難だ、と言ってはいるものの。
　まだまだ道のりは多難そうだ、と、何も言わずに院長は一行を見守るしかなかった。

● Sheol　-有り得なかった夢-

橘診療所が神域であるなら、そこから続く一番重要な世界は、おそらく凪を閉じ込めた黄泉(シェオル)だった。

ヒトの世界とは混沌より生じ、混沌に還る循環の一部だ。混沌を形に成すものが神の与えた「意味」で、世界のヒトは全て、「神」の器であるのだ。

黄泉はというと、混沌が崩れるか形を得る前に、一時留まる境界地だろう。墓場とも生まれる前の居場所とも言えた。

「.....気が重いが、久しぶりに顔を出すか」

ごく小さな黄泉の一端である凪の部屋。更に奥へいくと今度はゴミ捨て場である炎獄(ゲヘナ)に出る。そこには黄泉に留まれない暴れ者や魔物が集まり、また悪魔が様々なものを打ち捨てる生け贄の谷底でもある。

院長はちょくちょく、炎獄で新鮮な骸(むくろ)を拾っては、その灰から人形を復元してやる。そうして仮初めの器を造ることが、本来の彼――人間だった「灰夜」の特技(意味)だった。

死骸に群がる蠅の悪魔。実際には「灰の神」だが、蠅と灰は響きが似ている。

混沌の塵芥(ちりあくた)からヒトを造る。どれだけ長い間、その業を繰り返してきたのだろう。「神」である彼はそうなった時から、消滅することができなくなった。

だから疲れた時には、自らの命を自身で奪い、記憶をリセットする初期化を行ってきた。それも診療所を始めてからは、多重に存在する己の記憶が重なり、完全な記憶の抹消が難しくなったが、その分気軽に初期化できるようになった。一から全てやり直しでなく、ある程度己の情報を読み込めるリセットは、嫌なことだけを遠ざけていける。

永い過去の何処かで、歪(いびつ)な妖狐である凪と縁を結んだ。その頃はまた違う名前で、診療所を建てて凪を閉じ込める時に、連れ合いたる自身の存在もリセットした。

それでも忘れ去ったはずのナギともう一度出会い、気が付けば番(つが)っていた。凪ともまた顔を合わせるようになり、結局彼女達が望むままに、運命への介入を手伝っている。

彼と二人だけの世界。座敷牢にしか見えないだろう小さな黄泉を、凪はそう呼んだ。

黄泉自体はここ一か所でなく、世界中の何処にでもある。ただその鍵を持つ高次存在は少なく、主に天使が管理を担い、死者の葬送が行われている。

死神業をしていた氷輪翼槍は、天使時代のナギから鍵の力を渡されていた。現在ナギは堕天使であるため、黄泉の鍵はそのまま氷輪翼槍が持っているはずだ。だから彼が会わせない限り、ナギと凪は会えないままだろう。それでも彼女らは互いの記憶を一部、夢視で共有している節があった。

滅多に開けない奥のドアを、なるべく静かにそっと開いた。真っ暗な中に入って電気のスイッチを入れると、最奥にあるベッドの上で膝を抱える人影が、明かりがついたと同時に顔を上げた。
「――アッシュ！　来てくれたんだ……嬉しい！」
その名を彼はもう使っていない。彼が記憶を初期化したと知っているはずなのに、相変わらず無邪気な顔で笑う凪が、ベッドからは降りずに声だけで彼を出迎えていた。

外の世界で、人形の体を使う堕天使のナギは、モデルになった吸血鬼と同じ顔をしている。対して黄泉に閉じ込めた凪は、彼女が本来在った姿をしている。
長い薄紅のまっすぐな髪を一つに束ね、薄い色の目で彼を見つめる。黒い少女の桃花は黒ずくめの彼に似て、色味の鮮やかな凪に似たのは咲杏（さくら）というもう一人の娘だ。
咲杏はどの時空でも彼らから離れ、やがて「咲姫（さき）」と名乗るようになる。桃花は必ず彼らから失われ、そのために凪は、ありとあらゆる運命への介入を行ってきた。
「ねえ、桃花は元気にしている？　アナタがここに来たってことは、帰ってきたんでしょう？」
「……」
「流惟（るい）と仲良くできるかしら。どっちもあの子なんだから、一緒になれれば良かったのに……でも猫羽ちゃんのためだから仕方ないよね、今の桃花はちゃんと、猫羽ちゃんを守っていてくれる？」
凪の目は彼を見ながら、今ここにいる彼のことは何一つ見ていない。ただ気忙しく、いつものように変えるべき運命の現状を確認してくる。
今日は彼も凪にきかなければいけない。この黄泉に潜む凪を、隣から引き留めてくれている炎獄の主について。

「……桃花は漣（さざなみ）の元へと今後行くはずだ。それをおまえが支えることはできるのか、凪」
「あれれ？　そのためにあたしはここにいるのでしょう？　炎獄の天使、秩序のさざなみ、そうなれと言ったのはアナタなのに？」
横座りに体勢を変えてにこにことしながら、凪の目に殺意が宿った。この凪が愛したのは「アッシュ」であって、凪を閉じ込め続ける彼とは言えない。
「秩序の管理だって、時雨君を使わなくて良かった。せっかく、汐ノ香（しおのか）を守ってとアドバイスしたのに……そうしてくれたら、時雨君もすぐに解放されたのにね？」
凪の計算は、常に叶ってきたわけではない。膨大な時空の歴史の中で、彼女が見つけ、介入できる綻びはそう多くない。上手くいかなかった過去の結果、現れた想定外の存在の一人が「汐音」であることだけは、院長もそれとなく聴かされていた。
「……その辺りは汐音次第だ。だからそろそろ、どうすれば汐ノ香が消えないのか教えてくれ――汐音、あの天使の忘れ形見は、中身はいったい誰なんだ、そもそも」

汐音が幸せになれる未来はない。凪ではなく、堕天使のナギはそう憐れんでいた。

汐音を形成している大元は、過去に消えてしまったある天使の翼だ。凪の世界では汐ノ香（しおのか）といい、氷輪翼槞を助けようとしていた天の国の守り手だった。「汐音」の名を吸血鬼の意識の一つにつけたのは院長で、それは唯一、「汐ノ香」の翼の持ち主であると知っていたからつけた名前だ。

ツバメは戻せても汐音は救えない。そうナギは嘆いていたが、黄泉の凪は秩序と混沌を司るさざなみの近くに在ることで、ナギより多くの運命が視えていることも彼は知っている。

凪は無邪気な顔に戻り、「？」という空気を散らつかせている。その反応は、汐音のことがわからないのではなく、そこに拘る彼が不可解というだけだろう。

「汐ノ香が残した翼から生まれた汐音。あたしは汐音には会えないんだから、その理解で何の問題があるの？」

「……そうだな。おまえと汐ノ香の在る時空には、まず汐音は存在しない」

うんうん。笑顔で頷く凪に対して、彼はここに来た目的を告げた。

「でもナギは揺れている。汐音も助けられる未来はないか、あいつは探し始めてるぞ」

ナギと凪。同じ存在である者達の認識のずれ。時空の差異と言ってしまえばそれまでだが、一番近い彼はそこに確かな違和感を視ていた。

「凪。おまえの望みを、今一度きいておきたい」

診療所を建ててから、ずっと凪の望み通りに動いている彼が、改めて連れ合いを黒い目で見つめる。瞳孔のない平坦な神の眼から感情が消えた。

「あたしの、望み？」

「烙人を戻す、猫羽を風漓（かざり）にしない、その目的と手段は何度もきいた。それは本当に――おまえの望みなのか？」

これまではもう向き合うことをやめていた。すでに炎獄の長に囚われている凪は、長が管理する波打つ運命から目をはなすことができない。それは永遠にさざなみに振り回されて、平穏（なぎ）を求め続ける哀れな黄泉だ。

けれどナギは抗っている。炎獄の長を「敵」だと、ツバメを戻す際に言っていた。

――あたしと敵対する、『漣（さざなみ）』という使徒がいるの。

そして今回、確かに凪の言う通り桃花は橘診療所に戻ってきたが、それはナギの存在する時空においてのことだ。凪の元に帰ったわけではなく、しかも今後の桃花は「冥夜」へ変わってしまう。

凪がいる時空は、有り得なかった夢――猫羽が彼の娘と言える世界だ。彼と凪の娘の桃花が猫羽を救う。そうしなければ猫羽が生きられない未来を知った後、凪は桃花と咲杳を過酷な境遇に晒して運命を変えた。猫羽と凪に、直接の縁はないにも関わらずに。

「それが猫羽も、桃花も咲杳も残す道.....おまえはそう言ったな」
「.....」
「実際にそうなったのはナギの世界だ。この黄泉には何の揺らぎもない.....おまえの望みは、凪を消して今度こそナギになること――俺にはそうとしか見えない」

　座り込んだままで、凪の表情が無になっていった。
　凪はもう、妖狐だった己の体を失っている。だから黄泉に天使として留まっている。
　そうなるよりも遥かに前に、彼が最初に凪と出会った時、彼は凪が早逝する運命を変えた。早逝した凪が成るはずの者こそ堕天使のナギだった。
「俺はおまえを凪のままでここに留めた。今後もおまえとナギを会わせる気はない――おまえをナギに変える気はない」
「.....」
　今回彼は、この意志を凪に伝えに来たのだ。たとえ現在の「灰」が、凪を愛した記憶を失っていても。

　それから凪は人形のように固まったまま、何も反応することはなかった。彼も黙って背を向けて、白衣のポケットから煙草を取り出しつつ、二人だけの世界を後にする。
「桃花と猫羽、そして風漓。後一人の生け贄は、多分.....」
　ぱたん、と黄泉の扉を閉じた音で、シから続く最後の文節はかき消されてしまった。
「新たな世界の鍵は山科ツバメ。吉と出るか凶と出るか.....炎獄に投げ出された妹を見ても、お前は己の選択を遂げられるか？　　汐音の相方」
　それは昔の彼にも通じる呪いの祈りだった。最早たった一つの選択などできることがなくなった院長は、数多の運命の交差点に静かに戻っていった。

-了-

初稿:2020.6.17
Many thanks for your visit.

迷探偵猫羽の乙女事件簿・序

著　　pierrette***

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社